帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起—内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

6月5日
5日、20日発行
357号
編集発行人　鹿島　昇
1部　50円

戦旗社
東京都新宿区番衆町10の8
コーポハピービルE1号
電話　03（356）2982
振替　東京26110

6・15 安保一日「韓」体制打倒 大統一行動へ！

帝国主義天皇制攻撃に抗し

7・20沖縄海洋博粉砕！皇太子訪沖阻止！

全国の同志諸君！労働者人民諸君！

「復帰」後三年目を向かえた沖縄は、ヴェトナム・カンボジア革命戦争の勝利、爆発点に達しつつある朝鮮危機を巡って、侵略反革命戦争の渦中に増々深く組み込まれ、沖縄解放闘争の重大性は、今や増々大なるものとなっている。

この様な中で五・一五闘争は、インドシナ人民の破竹の進撃と連帯し、悪逆非道なる弾圧に、なおも屈せず闘い抜く韓国民衆の血叫びをうけとめるべく、そして戦闘的に闘い抜く沖縄人民との国際主義的連帯を求め、果敢かつ戦闘的に打ち抜かれ、海洋博粉砕、安保—日「韓」体制打倒の突破口が切り開かれた。

社・共人民戦線派の統一地方選、票集めへの埋没と、七五春闘における既成労働運動指導部の資本家階級への屈服という中にあって、革命的左翼の任務は重大である。被抑圧民族・人民の苦闘と連帯し、血債にかけて、日帝の侵略反革命（戦争）を蜂起・内戦に転化する一大階級攻防を闘いとることが問われているのである。五・一五闘争の地平を更におしひろげ、今春—夏、日「韓」閣僚会議粉砕、海洋博粉砕闘争の大激闘に勝利し、七五年階級攻防の最大の環、天皇訪米絶対阻止に進撃せよ！

沖縄海洋博粉砕・皇太子訪沖阻止の突破口を切り開いた五・一五闘争

五・一五闘争の意義の第一は、文字どおり海洋博粉砕・皇太子訪沖阻止の突破口を切り開いたことである。帝国主義の反革命防破提の一角、インドシナが、ヴェトナム・カンボジア人民の決死の闘いによって大きく崩壊した現在、朝鮮危機の深化とあいまって、沖縄の反革命前線基地としての位置は、帝国主義者共にとって増々重大なものとなりつつある。沖縄人民の高まる米軍基地撤去闘争を「復帰」の幻想の下におさえ込み、返還後もボーズだけの米軍基地縮少、実際は圧倒的な基地機能強化がなされているのが沖縄米軍基地の現在である。ちなみに那覇空港返還を巡って米軍P3対潜しょう戒機などの嘉手納基地への移駐に、日帝は一八〇億円をかけ「西太平洋地域で最もモダンでぜいたくな施設」と米軍もビックリするような施設を建設しているのである。更に沖縄への自衛隊＝日本軍派兵完了の上に、日帝は海洋博に名をかり、沖縄の日米軍事基地機能強化、沖縄人民の反革命統合の総仕上げをなさんとしているのである。海洋博関連の道路事業六四三億円、通信事業二七〇億円、空港・港湾整備一四〇億円、あるいは原子力発電所計画などは、滑走路に転用できる六車線の道路を始めとして全て軍事用に転用されるものとして、まさしく全島軍事基地化、軍事機能強化のかくれみのとしての海洋博をうきぼりにしている。他方で日帝は海洋博の名誉総裁としての皇太子訪沖を強行し、沖縄人民の日帝への屈服を強い、反革命統合を完成させ、又もや沖縄人民を日帝のアジア侵略反革命戦争の尖兵に仕立てあげようとしているのである。五・一五闘争はかかる沖縄海洋博が、沖縄・日本人民の断じて許すべからざるものであることを全人民の前に明らかにしたのである。

第二に、七二年沖縄返還に対し火炎ビン立法、大量逮捕、重罪適用など破防法弾圧体制を唯一突破し、沖縄人民との国際主義的連帯を求め、五・一三神田武装遊撃戦をもって闘い抜いた、この五・一三戦闘精神を受けついで戦闘的に闘い抜いたことである。これは足立グループのこの間の、沖解同をはじめとした沖縄人民に対する敵対と反革命襲撃、五・一三公判闘争を巡る、被告に対するドウカツ・殴打による控訴強要等と、五・一三戦闘精神を正しく継承・発展させるのではなく五・一三戦闘の意義を食いつぶす堕落と比較すると対照的なことがらである。われわれは、昨年七・七猛省集会を通じ、自らの帝国主義的ショウビニズムを切開し、内省し、被抑圧民族・人民との真の連帯を克ち取る思想的水準を「血債・猛省精神」として打ち固め、狭山九月決戦、フォード闘争の鉄火の試練によって検証してきた。こうして五・一三戦闘精神の革命性を継承し、不充分性を克服してきたのである。

第三に、五・一五闘争の快進撃は返還（奪還）派の破産を全人民の前に明らかにした。返還派は、日帝の返還路線の幻想をあおり、七二年沖縄施政権返還によって沖縄闘争は終ったと宣言せざるをえなくなったし、又実際闘い得なくなってしまった。しかし「返還」以降三年沖縄は増々日米共同反革命軍事基地として強化され、米軍犯罪も一向に減らず、金武村での女子中学生暴行事件、伊江島発砲事件等として続発している。復帰後三年目を向かえ「生活は以前より苦しくなった」というのが世論調査の結果でもある。伊江島発砲事件に到っては、日本政府は裁判権を放棄するという暴挙にさえでた。米日帝国主義は沖縄人民全てにとっての敵であることが浮きぼりにされたのである。

沖縄人民は、返還派の破産にもかかわらずしかし力強く闘い続けている。五・一五闘争は返還派の破産をふみこえ、沖縄人民との連

帯を闘いとらねばならないことを全労働者人民に明らかにしたのである。

第四に五・一五闘争の意義はインドシナ人民の革命戦争の勝利と連帯し、韓国民衆の苦闘を受けとめ、アジア人民に敵対する安保ー日「韓」体制再編強化の軸、天皇訪米絶対阻止第二波闘争として打ち抜かれたということである。

カンボジア・ヴェトナム人民は全土解放を闘いとり、ラオスでは国軍右派を打倒し、パテト・ラオが実権を掌握しつつある。

民族解放革命戦争の勝利の為に「北で生まれて南で死ぬ」ことをいとわぬ戦闘精神、敵を孤立化させ、ありとあらゆる勢力を革命に動員し、敵から武器を奪って武装し、人民の魂にふれる革命を遂行するインドシナ人民の戦闘精神に学び、日本階級闘争の戦略的推進の為に身命を賭して奮闘することができるのか否かがわれわれに問われている。これを問い返しわれわれは五・一五闘争を闘い抜いた。

カクマルは、「都市攻略において都市内部からの人民蜂起の呼応がない点は前二回の攻勢と同様である。ユエやダナンで攻略後直ちに結成された第三勢力を頭にいただく〝人民権力〟は政治的粉飾にすぎない。そこにはサイゴン政権下の人民の組織化が常に隘路となってきた現実を、軍事的増強で強引に突破したという今回の特徴が端的に示されている。〝民族自決権〟を掲げて小ブルジョア諸勢力と政治的に野合するーこの政治工作で補われた軍事力学主義の、すなわち民族解放戦争路線の腐敗はより深化しているのだ」（カクマル解放五月二八日号）と強弁している。ここにあらわれたカクマルの腐敗は徹底的にあばきたてられなければならない。第一に「都市攻略において都市内部からの人民蜂起の呼応がない」という断言が、根も葉もない全くのデッチ上げだということである。ブルジョアマスコミでさえユエ・ダナン・サイゴン攻略の際、カイライ軍の反乱を含む人民の決起を伝えていることがあげられれば充分であろう。カクマルがこうしたデッチ上げを策する根拠は、今回のヴェトナム全土解放がヴェトナム人民の自らの解放ー革命戦争と無縁で、スターリニストによる人民抑圧支配が現出するだけだと言わないかぎり、彼らの「ヴェトナム反戦論」の骨子である「帝とスタとの代理戦争」論が破産してしまうというところにある。文字どおりヴェトナム革命戦争の勝利は、カクマルの破産を証明したのであり、だからこそ、かかるデッチ上げでのりきる以外道がなくなったのである。

第二にこうしたデッチ上げはカクマルの「ヴェトナム反戦論」の破産を示すだけではない。カクマルの反革命性を赤裸々にしている点が更に重大である。帝国主義者共はこれまでヴェトナムに対する侵略反革命戦争を「共産主義の侵略」の名の下に正当化をはかってきた。日帝宮沢外相は今回の事態に対して「他民族が共産主義の下に隷属するということは不幸なことである」と反革命発言をなし、祖国解放をいわって在日ヴェトナム大使館に決起した留学生を機動隊をもって弾圧し不当逮捕するという暴挙を行っている。カクマルはこうした帝国主義者共のデマゴギー攻勢に屈服し、まさしく帝国主義者共の陣営からヴェトナム人民の自らの解放ー革命戦争に敵対している。だからカクマルは帝国主義的社会排外主義であり反革命的なのだ。

第三に、かかる帝国主義的社会排外主義、反革命カクマルの作風は、ボリシェビズム、マルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもないメンシェビズムだということである。レーニンは、マルクスが一八七一年三月パリ労働者の蜂起に対してとった態度をあげて、プレハーノフをはじめとしたメンシェビキを批判している。「不吉な前兆があったにもかかわらず、非常な感激をもってプロレタリア革命を歓迎した」「コンミューン戦士の天をもおそう英雄精神」にプロレタリア革命の魂を見てとり、「ちょうど偉大な革命思想家たちが、被抑圧階級の大運動に学者ぶった『お説教』（プレハーノフの「武器をとるべきではなかった」とかツェレテリの「階級は自制すべきである」とかいった）などけっしてしないで、みなそうした大運動の経験に学ぶことを恐れなかったように、マルクスはコンミューンに『学んでいる』のである」（国家と革命）と。そして「プレハーノフは、一九〇五年十一月には、労働者と農民の闘争を激励するために筆をとりながら、一九〇五年十二月には『武器をとるべきではなかった』と自由主義者ふうに悲鳴をあげたのである」と。そして又一九一七年十月ボリシェビキの蜂起に全国ソビエト総会の（形式的）決定によって遂行されたものではない等をもってマルトフをはじめとしたメンシェビキが「これは春ではない」と悲鳴をあげたことも想記されなければならない。

「帝とスタとの相互依存・相互反発」という世界の解釈からヴェトナム戦争を「帝とスタの代理戦争」と規定し、今回のヴェトナム全土解放を「民族解放戦争路線の腐敗の深化」などと言って、米帝放逐・チュー打倒・革命政府樹立という戦争的激闘、解放戦士の文字どおり「天をもおそう英雄精神」にツバするカクマルは何とメンシェビキの作風に酷似していることだろうか。

ヴェトナム人民の英雄精神に学び、又更なる暴虐に屈することなく闘いつづける韓国民衆の血叫びを受けとめようとするならば、日本労働者人民は、アジア人民の不倶戴天の敵、戦犯天皇をかつぎ出し、侵略反革命戦争へ体制的重みをかけ策動された十月天皇訪米絶対阻止を「日帝の侵略反革命戦争を蜂起ー内戦へ」の大水路を切り開く闘いとして闘い抜くのでなければならない。五・一五闘争はまさしく天皇訪米絶対阻止第二波闘争として大爆発を克ちとったのである。

インドシナ人民の勝利と危機を深める朝鮮半島

インドシナ三国人民の破竹の進撃は、四・一七プノンペン解放、四・三〇サイゴン解放を闘いとり、ヴェトナム・カンボジア全土を解放し民族解放革命戦争の歴史に偉大な勝利を刻印した。三十年戦争を経て、抑圧と搾取とじゅうりんの下に組みしかれてきた被抑圧民族・人民の不屈の解放に向けた魂が今や動かしがたい歴史のすう勢となって、帝国主義のじゅうりんを打ち砕き、追いつめているのである。何者もこれを押しとどめることはできない。サイゴン陥落によって忘然自失した米帝、やけっぱちで投機的なる「マヤゲス号事件」を口実とした武力侵行も、このすう勢を押しとどめることはできない。

戦後帝国主義の反革命体制の重要な一角の崩壊は今日、米・日帝国主義・カイライをして増々絶望的侵略反革命戦争へとかりたてつつある。韓・日・沖縄・台湾・フィリピンを結ぶラインへの反革命前線の再編とたて直し、とりわけ安保ー日「韓」反革命体制を要として侵略反革命戦争の絶望的激化をもって応えんとする米・日帝国主義・カイライ共。他方インドシナ革命戦争の勝利は帝国主義・カイライに組みしかれてきた第三世界人民に限りない勇気を与え闘争意欲を高めている。この対決が最も激烈かつ尖鋭なる爆発点に達しつつあるのが韓国を巡る情勢である。

朴反革命カイライ政権は、米・日帝国主義の庇護の下に暗黒の恐怖政治を韓国民衆に強い、全ての正当なる抗議のこえを抹殺する、緊急措置第九号を発令し「事実上の戦争状態」を宣言した。すなわち戦時体制ー戦争遂行による以外、現在の危機をのり切ることができないということを明らかにしたのである。

インドシナにおいて手いたい敗北を喫した米帝は、韓国のかかる危機への直面に焦燥を深め、一方で米軍のアジア軍事戦略の再編ー第二の朝鮮戦争体制への再編を急ピッチで進めると共に他方で日帝のかかる体制への積極的介入を要請している。

現下の朝鮮危機で米帝以上に危機感をつのらせているのが日本帝国主義である。日帝にとりあらゆる面で自らの存亡と不可欠なる韓国であってみれば問題は深刻である。故に日帝三木は米帝以上に朴カイライ護持に必死であり、この様な中で日「韓」閣僚会議開催が決定的役割を果すことは自明である。六五年以来の日「韓」体制の飛躍的強化、戦争体制への再編をめざす以外の何物でもない、日帝の侵略反革命戦争への飛躍台となる恐るべき攻撃なのだ。

かかるアジア情勢は、米・日帝をして極東のキーストーン軍事基地沖縄を増々重大なものとさせつつある。沖縄「復帰」後三年、米軍基地は実質的に強化され、日本軍＝自衛隊の大部隊が派兵を完了している。在沖米軍は訓練をインドシナ用のジャングル戦から平原・山岳戦にかえ、朝鮮半島での戦争遂行に照準を定めたことを明らかにした。沖縄海洋博は、沖縄の日米軍事基地の強化を促し、沖縄人民を日帝の侵略反革命戦争体制の下に組みしく策謀に満ち満ちている。米・日帝国主義は、沖縄を侵略反革命の前線基地として更に強化し、絶望的なる侵略反革命戦争のドロ沼へ、更に深くわけ入らんとしているのである。

それと共にインドシナ侵略反革命戦争の惨敗と勢いを得た民族解放ー革命戦争の拡大に恐怖し、身を寄せあう米・日帝国主義のアジア危機に対する反革命同盟安保の反革命戦争体制への命がけの飛躍をかけた再編攻撃が進められている。宮沢外相訪米ーキッシンジャー会談は、日米安保の相互防衛義務を再確認し、とりわけ六九年日米共同声明の「韓国の安全は日本の安全にとって緊要」なる、いわゆる「韓国条項」の実際上の問題を巡ってつっこんだ反革命謀議が行われ、八月三木訪米が決定された。日帝は国防会議＝侵略反革命戦争謀議を召集し、又日米防衛分担の再編に積極的に乗り出しつつある。こうして十月天皇訪米をもってする米・日帝の侵略反革命戦争突撃体制構築の下準備をなしているわけである。

戦後帝国主義世界体制の崩壊的危機、これに規定され、直撃された日帝の内外を巡る体制的危機のドラスティクな展開は、再度天皇

のかつぎ出しによる人民の反革命統合、侵略反革命戦争体制への体制的重量をかけた攻撃として策謀されている。フォード来日・エリザベス来日における天皇の「国家元首」としての大儀式はロンドンっ子の目を見はらせた。又日帝の警察官達の名誉欲を満足させることであろう。こうして皇太子訪沖・天皇訪米への道がはき清められてきたのだ。日帝は六〇年代以来の被抑圧階級、プロレタリアートの階級的攻勢による議会制支配危機に、天皇かつぎ出しによる官僚的、軍隊的、警察的権力支配への転成策動＝帝国主義天皇制攻撃で乗り切ろうとしているわけである。日本社会の肉体にからみつき、その全ての毛穴をふさぐ恐ろしい寄生体の完成に血道をあげる攻撃が他方での天皇訪米への企みなのである。

そして更に、日米安保の侵略反革命戦争への命がけの飛躍を策す天皇訪米、帝国主義天皇制攻撃がアジア人民の不倶戴天の敵、戦犯天皇をかつぎ出した、再度アジア人民をじゅうりんし、殺りくせんとする攻撃であってみれば、往年のアジア侵略の「血債」を今だ償還し得ぬ日本労働者人民にとり、何としても許すことのできないものであることも又確認されなければならないのである。

党ー革命勢力の飛躍をかけ安保ー日「韓」体制打倒へ進撃せよ！

インドシナ人民の民族解放ー革命戦争の勝利というこの偉大な世界史的大業は、現代過渡期世界が世界共産主義への過渡期＝世界プロレタリア独裁を展望する戦争と革命の時代、帝国主義が腐敗・没落し革命が前進する時代であることを知らしめている。と同時にインドシナ革命戦争の進撃によってもたらされた新たな国際階級情勢は、闘う日本労働者人民に大きな飛躍をせまっていると言っても過言ではない。

底なしの侵略反革命戦争のドロ沼へ日本労働者人民をたたき込まんとする日「韓」閣僚会議、沖縄海洋博、天皇訪米を、アジア人民沖縄人民への血債にかけた闘いとして、インドシナ人民のように闘い、第二の十・八を切り開くような激闘をもって粉砕・阻止し抜くための飛躍がその第一である。そのために全人民的政治暴露、宣伝・煽動に更なる勢力をつぎ込まなければならない。ありとあらゆる場所で、ありとあらゆる機会をとらえ、ありとあらゆる武器を駆使し、ありとあらゆる勢力をかたむけ突撃することである。

その第二はかかる突撃が革命的展望の下に闘い抜かれることが肝心である。「安保ー日『韓』体制倒」「帝国主義の腐朽性に抗し、被抑圧民族・人民と連帯し、共同反革命を蜂起ー内戦・世界革命戦争へ」「日帝の侵略反革命（戦争）を蜂起ー内戦へ」の総路線の下、日本階級闘争の戦略的前進に向け、しっかりと団結し闘い抜かねば一歩も先に進むことができないのだ。帝国主義の崩壊的危機と侵略反革命が深まりゆく時期は同時に、革命の対極に膨大なる社会排外主義が生み出されるのであり、下層労働者の戦闘性もアナルコ・サンディカリズムとして放置されるならば労働者人民は結局屈服を強られる以外ない。日和見主義・経済主義・社会排外主義と徹底的に対決し、革命的労働運動の火柱を打ち立て日帝打倒・プロレタリア独裁を当面の目的としてすえきって奮闘しなければならない。革命的宣伝のために更に勢力をかたむけることが大切である。

第三にそれは同時にかかる革命的闘いを真に担い抜ける党ー革命勢力の建設に参加することを自ら要求することであり、革命戦争を担い抜く党ー革命勢力としての飛躍が問われているのである。党ー革命勢力としてかかる世界史的階級的事業を担い、又真にこの歴史的大業を担い得る党ー革命勢力へと自らを打ち固める格闘こそプロレタリア自己解放に向けた労働者人民にさけて通ることのできぬ道である。総路線の圧倒的物質化に向け組織計画をたずさえ、不断に政治・組織・思想的切開を行い、自らをブルジョア的俗物根性、帝国主義的俗物性から俊別し階級的主体への自らの飛躍を克ちとることなくして、帝国主義足下でヴェトナム人民のように革命的に闘い勝利を克ちとることはできない。破防法弾圧下、日増しに熾烈化する権力、政治警察から党革命勢力を防衛し、純プロ主義・社会排外主義を打ち砕き、必ずや日帝を打倒するほどの内的反省に裏づけられた強靱なる主体への飛躍が問われているのである。

沖縄解放闘争を巡る足立グループのわが同盟戦旗派と、そして何よりも沖縄人民に対する敵対襲撃路線と、闘う沖縄・日本労働者人民からの孤立による破産、そしてペテン的乗り切り策動は、彼ら足立グループが、かかる日本労働者階級人民の任務を、責任をもって果さんとする革命党の立場からはあまりにもかけはなれたものであることを浮きぼりにしている。ニセ「戦旗」紙上でいくら左翼的言辞が弄されようとも、労働者人民をだますことはできない。鉄火の階級闘争の試練は何が眉唾物であるかを赤裸々とするのだから。彼ら足立グループは、わが同盟の昨秋狭山九月決戦・フォード闘争の全同盟をあげた決死の闘いにあせり、沖縄解放闘争における反革命襲撃路線、ペテン的乗り切り策動、五・一三公判闘争における全員控訴のドウカツ路線（五・一三戦士への殴打と離反）の破産に動揺しつつも、内的反省を深めるのではなく「海洋博決戦」を呼号することによって乗り切らんとしている。けっこうだやってもらおう。しかし既に足立グループがその前哨戦として位置付けた五・一五闘争に「全国」動員して四十そこそこ、他党派含めても百弱である事態の中に、そして元気のないデモンストレーションの中に、彼らの海洋博決戦の破産がもはや予告されている。われわれは、足立グループの破産を陰ペイのための「決戦」にはわれわれの内省の上にたった文字通り鉄火の闘いによって、彼らを数倍上まわる闘いによって応えようではないか。

全ての労働者人民諸君！インドシナ革命戦争の勝利によって導かれた帝国主義の新たな侵略反革命戦争策動、増々重大性を深め激化する七五年階級攻防、とりわけ重大なる日「韓」閣僚会議粉砕、沖縄海洋博粉砕、天皇訪米絶対阻止を、安保ー日「韓」体制打倒に向け、革命党ー革命勢力の一大飛躍をかけて闘いとれ。インドシナ人民の偉大な勝利に学び、ヴェトナム人民のように闘うならば必ずや勝利はわが手に克ちとられるという確信に満ちて。

五・一五闘争の成果にふまえ、六・一五ー七・二○闘争へ進撃せよ！

五月闘争の大進撃をひきつぎ、六、七月、日「韓」閣僚会議粉砕、海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止を闘い抜くことの重要性は増すばかりである。

日帝＝朴反革命カイライ政権は、インドシナ人民の勝利に鼓舞され高まる韓国民衆の決起に向けた潮をおさえこまんと、金日成の訪中、共同声明を期に、「解放勢力の政権奪取に勇み立った北朝鮮は、すぐにも南の侵略に乗り出してくる」と危機感をあおり、八日国際勝共連合・大韓キリスト教連合会をはじめとした反共団体によって総力安保国民協議会をつくらせ、KCIAから郷土予備軍人、町内会をつかって反共集会を組織した。十三日大統領緊急措置第九号を発動し、二十日には「学徒護国団」を復活し、国民総動員体制、挙国一致の戦時体制によって何とか韓国民衆の反朴＝反日闘争をおさえ込まんとしている。

緊急措置第九号は、戦前の日本の治安維持法にまさるともおとらない、悪虐非道なしろものである。これは、①一切の政府批判を禁止し、それを報道することを禁止し、不屈に闘い抜く東亜日報をはじめとした報道労働者の一切の闘いを圧殺し、②学園での政治行為一切を禁止し、大統領緊急措置第七号攻撃に対しても屈せず千名の決起をもって決死の抵抗をつづける高麗大をはじめとする学生の闘いを圧殺し、③それにとどまらず政府にとって不都合なものは、既成法規適用の手続きによらず一切を取り締ることができる（例えば予防拘禁等）のが、緊急措置の内実である。

学徒護国団という名の学生の戦力化案は、①軍事教練を現行週二時間から四時間にふやし、②一年間に一度は十日間にわたる兵営暮らしを義務づけ、③学生をピラミッドの軍隊の指揮系列に仕立て直し、セマウル運動などの地域奉仕に当らせる、というものである。

五月十九日、金芝河氏を死刑にせんとする裁判が開かれたが、金芝河氏は屈せず、裁判官忌避で対決した。そして二十七日、スパイデッチ上げで死刑を宣告された崔哲教さんに対する上告審が行われ、死刑判決の大暴虐が加えられた。

かかる一連の弾圧や背後操縦を行っているのが日本帝国主義の姿である。日帝は、金鐘泌首相をよびつけ、戦時体制を維持する密談を重ね、戦時体制を支える援助を見積り、日「韓」閣僚会議への下準備をなした。それだけではない。外国人登録法改悪をもって在日朝鮮人ー韓国人への弾圧を強め、こうして椎名密約「韓国政府の転覆を意図する犯罪行為を取締る」を法制化せんとしている。在日朝鮮総聯をこの対象として設定し、総聯大会への外国来賓の参加をほとんど全て認めぬ攻撃を既にかけているのである。

六・一五闘争は第一に、三・一金芝河アピールに応え、日韓人民の闘う団結、日韓共同戦線形成の地歩を固めた四・一九闘争を継承し、更に苦しい闘いを強いられている韓国民衆と連帯せんとするとき、増々重大なものとして浮かびあがる日「韓」閣僚会議を何とし

（十一頁につづく）

海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止！

5・15へ二千名の熱気うずまく

足立グループはみじめに破産

ベトナム・カンボジア人民の戦闘精神に学び、その革命戦争勝利に連帯して闘われた五・一五沖縄返還粉砕三周年、海洋博粉砕、安保ー日「韓」体制打倒総決起集会は、戦闘的労働者、学生二千名を結集して圧倒的にかちとられた。

集会は沖縄海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止の巨大な隊列を登場させるとともに、十月天皇訪米絶対阻止の切り口を大きくこじあけ、日帝による沖縄の反革命統合との決死的対決をつくり出していった。

この集会は、「本土」で沖縄解放の持続的闘いを続けている沖縄青年との固い連帯のもとにかちとられたものであり、この国際主義的団結を更に打ち固め、沖縄の反革命前線基地化の最終的完成をつうじて東南アジアへの侵略反革命を強め、米帝なきあとのアジアの「盟主」として登場せんとする日帝との全面的対決を実現していくものとしてうちぬかれたのである。

集会では最初に、集会実行委から戦闘的な基調報告がなされ、続いて関東沖解同（準）より決意表明がなされた。沖解同（準）の代表は、沖縄の「復帰」後、日帝の沖縄の反革命統合ー政治的・軍事的・経済的支配の強化に対する闘いは、沖縄人民との団結を強める中で前進してきていることを明らかにしたのち、皇太子の海洋博名誉総裁としての訪沖を、それらの闘いをうけつぐ中で断固阻止する決意を明らかにしていった。

沖縄人民からするこの力強い連帯の決意表明には、参加者全員が圧倒的拍手で応え、会場には沖縄海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止の戦闘的決意がみなぎっていった。

集会では更に、国会決起裁判闘争連絡会議、島添さんの不当解雇を撤回させる会、沖縄労働者の会から、闘いの経過の報告と七・二〇海洋博粉砕に向けた熱烈な決意がのべられた。

そして、多くの沖縄人民と連帯して戦闘的に闘いとられていることの集会と連帯すべくかけつけた三里塚反対同盟の青行隊からは、「住民闘争ー沖縄の闘いに連帯して闘う」との、共に闘う連帯の挨拶がなされ、三里塚反対同盟北原事務局長からのアピールも紹介され、ますます安保ー日「韓」体制打倒、沖縄解放の熱気が高まっていった。

そうした中で、集会実行委に結集した多くの労働者諸団体から熱烈なアピールと戦闘決意がのべられ、最後に全国労共闘の同志から集会宣言が読み上げられた。労共闘の同志は、ベトナム・カンボジア人民の三十年にもわたる革命戦争に勝利しぬいたその戦闘精神に学び、沖縄解放、安保ー日「韓」体制打倒の闘いを、血債にかけて闘い抜かねばならないことを訴えたのち、「全労働者人民が、皇太子訪沖阻止の闘いを共同して闘うことを訴える」「七・二〇皇太子訪沖阻止の闘いをあらゆる職場・学園からつくりあげよう」と力強く集会宣言を読み上げていった。

この集会宣言の一句一句が読み上げられるたびに割れんばかりの拍手がまき起り、戦闘的デモへの熱気が高まっていったのである。

「ベトナム・インドシナ人民連帯！　日米韓反革命体制粉砕！　CTS建設阻止！　沖縄解放！」等のシュプレヒコールを日帝にたたきつけたのち、芝公園をうずめつくした二千の労働者人民は、沖解同（準）を先頭にデモに出発した。

機動隊の弾圧に屈することなく前進するデモ隊は、沿道の見守る人々に海洋博粉砕を訴え、戦闘的デモを貫徹していったが、とりわけわが労共闘の隊列は機動隊の規制をうち破り、革命的猛省精神をもって機動隊を押しまくり、終始一貫して最も戦闘的なデモンストレーションを行ない、その日の闘いをけん引していったのである。

足立グループ、孤立のすえ無残に破産

ところでこの日、討論集会に逃げこむことが出来ずに仕方なく檜町公園で屋外集会を開いた足立グループは、その反革命的体質を全面開花させ、当然のことながら大破産をとげていったのである。

三五〇のわが労共闘の部隊を先頭として二千の労働者人民が、多くの沖縄青年との連帯のもとに、海洋博を粉砕し、安保ー日「韓」体制を打倒するものとして圧倒的にかちとられた五・一五実行委の集会に比べ、檜町公園のそれは全体で百名足らずしか集められず、しかも足立グループだけでは四十名弱しか結集させることができず、閑散とした弱々しい集会しかおこなえなかったのである。

この事実は、足立グループがいかに闘う人民から孤立した、無縁な存在に転落しているのかを示して余りあるものである。これは、足立グループがこの間沖縄解放闘争を闘ってきた沖縄人民に敵対し、沖縄解放の闘いをセクト主義的に分断せんとし、更には沖縄人民そのものにまでテロルを加えるという、まさに沖縄解放、安保ー日「韓」体制打倒の闘いを真に闘っている部分にとって疎外物以外の何物でもないものへと堕落していることの証左であり、その反人民的、反革命的体質の全面開花の結果なのであり、そのような足立グループを労働者人民、とりわけ戦闘的沖縄人民が支持することなどは、ありえないのである。実際、五・一五実行委の集会において足立グループは、その基調提起の中で批判され、彼らの反革命性が全人民の前に明らかにされたのである。

また、足立グループの言葉の上での戦闘性にもかかわらず、集会での彼らの隊列はひよわで何ら戦闘性を感じさせるものではなく、そのデモも、わが労共闘の部隊が機動隊の弾圧に屈することなく、文字通り肉弾的闘いを貫徹することにより海洋博、皇太子訪沖阻止の突破口を切り開いた闘いとは全く比較にならない「おとなしい」デモしか展開できなかったのである。

まさに、ベトナム・カンボジア人民の革命戦争勝利に応え、沖縄解放、安保ー日「韓」体制打倒へ進撃するこの重要な五・一五の闘いにおいて、闘う人民から孤立し、沖縄人民と強固に連帯する戦闘的なものとしてかちとるのではなしに、弱々しい集会・デモしかおこなえなかった足立グループが、いかに「海洋博決戦」を叫ぼうとも、結局は五・一五闘争の拡大再生産以上のことをなしえる訳ではなく、戦闘的労働者人民、沖縄人民からの孤立をますます深める中で破産をとげていくことは、明らかなのである。

われわれは、解党分子足立グループのそのような反革命的体質、

上：沖縄青年との連帯のもとにかちとられた5．15集会
下：戦闘的デモを貫徹する350の労共闘の部隊

政治的・路線的破産をはっきりと見すえ、六・一五ー七・二〇の闘いを総力をあげて闘い抜く中で、これら足立グループの敵対・闘争破壊策動を決して許さず、安保ー日「韓」体制打倒の革命的大道をまい進し、闘う沖縄人民、韓国民衆との国際主義的団結をますます強化していかねばならない。

五・一三戦闘精神で海洋博ー皇太子訪沖阻止の突破口を切りひらく

わが労共闘を中核として二千名もの戦闘的労働者、学生、高校生を結集して闘いとられた五・一五闘争の第一の意義は、インドシナ全域における革命勢力の最後的勝利を目前にして、危機感を深める日帝がアジアへの侵略反革命、侵略反革命体制構築の策動をますます露骨にしている中で、これらの策動と真向から対決する、海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止、安保ー日「韓」体制粉砕の突破口をつくりだしたことである。

とりわけ、戦闘的沖縄青年を先頭にして、圧倒的労働者人民を結集してこの闘いがかちとられたことは、闘う人民の国際主義的団結の大きな前進であり、天皇ー皇太子をかつぎ出して行なわれている現在の帝国主義天皇制攻撃を粉砕する上で、大きな切り口をきり開いたのである。

五・一五闘争の第二の意義は、そのような帝国主義天皇制攻撃の焦点である、今秋天皇訪米阻止の第二波の闘いとして打ち抜かれたことである。

三・一金芝河アピールに応え、四・一九闘争を天皇訪米阻止の第一波の闘いとして闘い抜いたわれわれは、この五・一五の闘いではその闘いを更に発展させ、血債にかけて天皇訪米を絶対阻止する巨大な労働者人民の革命的うねりをつくり出し、今秋への前進を確実にかちとったのである。

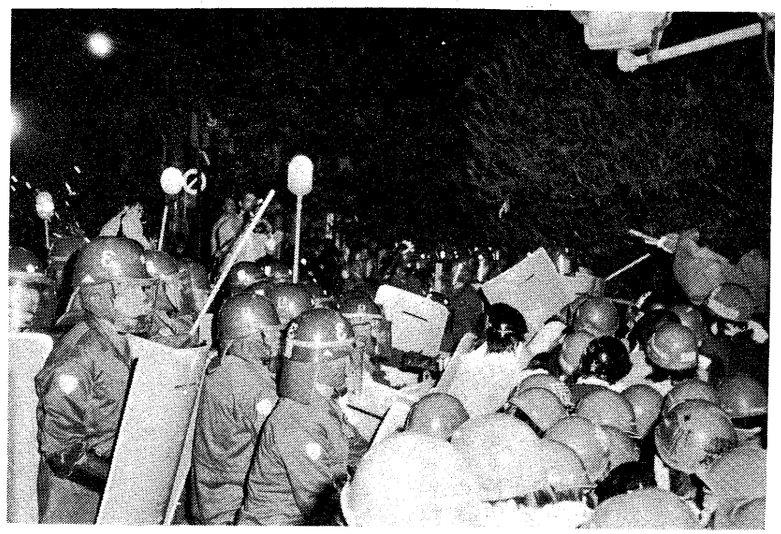
第三に、この五・一五の闘いは、七二年沖縄「返還」時に、沖縄返還粉砕を鮮明にかかげ、神田一帯を火の海と化した五・一三戦闘精神をうけつぎ、ベトナム・カンボジア人民の英雄的戦闘精神に学んで闘い抜かれたものである。

沖縄人民との国際主義的団結を求めた五・一三精神は、ベトナム・カンボジア人民の不屈の闘魂に学ぶことにより、一層打ちきたえられている。われわれは、この五・一三精神をもって、安保ー日「韓」体制打倒へ進撃していく必要があるのである。

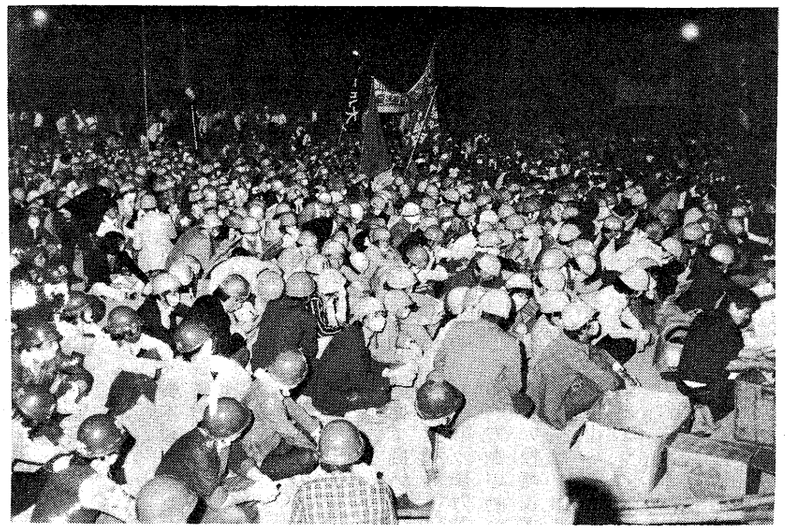
更に多くの労働者人民、沖縄人民の決起をかちとり、海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止へまい進せよ！

労働者人民の総力で、帝国主義天皇制攻撃を粉砕し、十月天皇訪米を死力をつくして絶対に阻止せよ！

ベトナム　カンボジア人民、韓国民衆の革命的闘いに学び、血債の思想、猛省精神をもって七五年階級闘争の一大高揚を闘いとれ！



機動隊の壁を打ち破り進撃する部隊



汽洋博粉砕へ総決起した二千の労働者人民（5・15）

5・24 名古屋 狭山集会へ二〇〇名

石川氏奪還へ固い決意

全国の同志諸君！

五月二十四日、愛知の地において「五・二三石川氏不当逮捕十二周年、十・三一大暴挙＝無期判決糾弾！」名古屋狭山集会」が二百余名の労学の大結集のもと、圧倒的にかちとられた。

この集会は、この間愛知における狭山ー部落解放闘争を戦闘的に闘い抜いてきた全愛知狭山行動委のよびかけに応えて結成された、五・二四集会実行委によって主催されたものであり、獄中十二年の石川氏との連帯、狭山闘争の歴史的完全勝利の方向性を鮮明にうち出す重大な意義を有するものなのである。

十・三一大暴虐に対する限りない憤激と石川一雄氏奪還の意気込みに燃える先進的労働者・学生が定刻前から続々とつめかける中、司会の同志によって集会の意義が明らかにされた。

それは、何よりもこの二十三日に不当逮捕十二周年を迎えた不屈の英雄戦士石川氏との強固な連帯をかちとり、十・三一判決を爆砕して石川氏を生きて奪還する、狭山闘争の再々度の大高揚に向けた巨大な一里塚としてあることとして提起された。

そして集会の基調報告においては、狭山事件ー裁判の経過を「無実・差別」を基軸としてふまえつつ、昨年十・三一判決の政治性、差別性を怒りをこめて確認し、最高裁闘争に向けたとりくみの重要性を満場の「意義なし」によって意志統一したのである。

そして更に、十・三一判決を粉砕し狭山闘争の歴史的完全勝利を闘いとるためには、日帝のアジア侵略反革命戦争遂行と、それに向けた沖縄海洋博、天皇訪米等の攻撃に対する徹底した対決こそが不可欠であり、石川氏の「権力打倒なくして部落解放はあらず」という烈々たる血叫びに応えぬく政治闘争の大高揚こそが問われているのだとして、六・一五闘争への決起が訴えられていったのである。

戦闘的な基調提起によって増々高まる熱気の中、連帯の挨拶にたった部落解放同盟愛知県連谷口氏は、それに先立つ二十一日、集会実行委も参加して闘いとられた名古屋市糾弾闘争の報告をはじめ、県下の部落解放闘争の進展を明らかにするとともに、反革命差別者集団＝日本共産党との対決の重要性、狭山闘争への労働者の決起を訴え、「日本革命に勝利し、人間に光をもたらすその日まで、共に闘おう」と心からなる連帯の意を表明していった。

参加者一同はこれに熱い連帯の拍手で応え、続いて映画「狭山の黒い雨」の上映を行なった。

そして上映終了後、集会最後に獄中の石川氏よりこの五・二四集会に寄せられた連帯アピールが読み上げられ、胸を打つ感動と闘う決意のいやます中で、集会は成功裡にその幕を閉じたのである。

全ての同志諸君！この五・二四集会でも明らかにされたように、狭山闘争完全勝利に向けたわれわれの任務は明白である。来年一月の上告趣意書提出ー最高裁闘争に向けて、再び三たび、狭山闘争の大衆的高揚を創出すること、そして何よりも、アジア侵略反革命と国内差別分断支配強化をめざす日帝国家権力と真正面から対決する今秋天皇訪米阻止決戦に勝利しきることである。

十・三一体制打倒、石川氏即時奪還に向けて、共に闘い抜こう！

5・26本山現地門前闘争を貫徹

東京では東営―ユーザー闘争たたかわれる

五・二〇東京営業所―ユーザー闘争を四〇〇名で闘う

本山資本は、昨年末の地裁による「別棟就労」という反動的な判決の支援をうけ、今や本山闘争は終ったかのようなデマ宣伝をマスコミを通じて流してきました。

こうしたデマ宣伝を打ち破り、権力―資本一体となった本山支部弾圧攻撃を粉砕するものとして、全都の戦闘的労働者四〇〇名によって果敢な実力闘争として闘い抜かれました。

当日朝、坂本町公園に結集した部隊は、地下鉄茅場町駅から本山東京営業所に至る道を制圧した部隊は、機動隊に身を守られながら営業所に入ろうとする職制・二組暴力集団に対して、固いスクラムをもって阻止する闘いを貫徹していきました。

本山闘争の圧殺をはからんとする国家権力機動隊は、東京営業所近辺に戒厳体制をしき、ますます労働者から追い込まれている本山資本を何としても防衛せんとして部隊に対して暴力的弾圧をくり返してきました。しかし本山の戦闘的労働者との連帯の意気にもえる部隊は、三十分にもわたる権力、暴力職制の暴行にもめげず、ピケ闘争を貫徹しぬき、引き続いてユーザー闘争へと決起していきました。

午後、再度坂本町公園において中央・千代田地区の争議団の労働者と決起集会を開き、地区の多くの労働者との連帯をかちとった部隊は、勤労福祉会館まで戦闘的デモを貫徹し、すぐさま霞ガ関ビルにあるTECに対するユーザー闘争に向かいました。

TECは、この間「本山の製品を買うな」という要求に対してあいまいに逃げており、当日も団交の席に責任ある者を出さないというように、明確な解答をさけ、何としても本山資本を支え、全金本山支部の正当な要求をふみにじらんとしていることを暴露したのです。

しかし部隊はTECを追及し、明確な回答をすると言うところまで追い込んでいきました。

権力―資本一体となった暴力弾圧と、デマ宣伝の中、実力闘争として闘い抜かれてきた本山闘争は、当日の闘争を第一歩に新たな攻勢に移ろうとしています。

現地では、今春闘において二組は〇回答の中で、会社・組合に対する不満が噴出しており、そうした中で本山支部の仲間は、「権力―資本のいかなる攻撃に対しても徹底して実力闘争で現職場奪還の闘いをやり抜くことを決意しています。

すべての労働者諸君！　既成指導部の七五春闘からの逃亡をのりこえ、労働運動の新たな潮流の最先頭で闘い抜いている本山の仲間と固く連帯して、権力―本山資本―二組の暴力支配を打ち破り、革命的労働運動の地平を切り開き、日帝の侵略反革命と対決し、安保―日「韓」体制打倒、十月天皇訪米阻止へ向けた巨大な隊列を打ち固めよう！

五・二六現地闘争へは七〇〇名

全金本山闘争五年の死闘にふまえて、五月二十五日現地仙台で総決起集会、二十六日門前実力闘争が戦闘的に貫徹されました。

七五春闘を、全国争議団と連帯した全金本山闘争、とりわけ東京営業所等に対する闘い、地域労働者への情宣、ユーザー闘争として闘い抜いてきた戦闘的労働者と本山支部との団結はこの間ますます強まり、労働者の敵＝本山資本は追いつめられています。

その結果、本山資本は暴力ガードマンへの支払にも事欠き、第二組合には「賃上げゼロ回答」という有様です。

こうした全国営業所闘争―ユーザー闘争にふまえ、同時に昨年末の別棟就労に関する反動的判決へのまき返しの第二弾の現地闘争として五・二五集会、五・二六門前実力就労闘争は貫徹されました。

二十五日教育会館に決起した全国の労働者七百名は、分宿体制をとり、二十六日早朝から本山製作所正門・裏門に総結集し、門前に配置された機動隊を押しまくり、有刺鉄線のバリケードで固められた門前闘争を闘いぬきました。

そのあと門前で三時間の決起集会を貫徹し、市内デモを行い、宮城県警による七名もの不当逮捕をものともせずに闘いを最後まで貫徹していきました。

坂本町公園での決起集会（五・二〇）

5.23 狭山現地で圧倒的情宣

十・三一大暴虐糾弾！　無実の石川氏奪還！　狭山闘争の歴史的大勝利へ向け、狭山現地入間川、川越、所沢の各駅頭において圧倒的情宣を闘い抜いたことを報告します。

当日、埼玉労共闘、高飯共闘の同志は、昨年九月決戦の意義を踏まえ、だがしかし十・三一大暴虐を許してしまったことを痛苦にとらえかえし、更なる闘いの大爆発を必ずやかちとり、獄中の石川氏を奪還し、狭山闘争の歴史的勝利へ向け進撃していく事を固く意志統一し、多くの労働者人民へ向けて狭山闘争への決起を訴えていきました。

狭山事件が日帝国家権力により部落差別にもとづいてデッチ上げられた差別裁判であること、それ故十二年もの獄中生活を強いられている無実の石川氏を何としても奪還しなければならないという戦闘的アピールは、多くの労働者、市民の共感を呼びおこし、狭山差別裁判糾弾！　の熱気が高まっていきました。

しかし、何とか狭山闘争の高揚を圧殺せんとしてきた権力は、わが部隊に対し様々な弾圧―敵対を行なってきました。とりわけ狭山現地入間川においては、狭山署公安茂木を先頭にビラ配布・署名を露骨に妨害するという暴挙を行なってきました。

しかしわが部隊は、そのような弾圧を粉砕し、石川氏の革命的戦闘精神に学んで断固とした情宣を貫徹していきました。

全ての労働者人民諸君！　インドシナ人民の勝利、朴反革命カイライ政権の暴虐の嵐の中で生命を賭して不屈に闘い抜く韓国民衆の闘いの前に、現在日本帝国主義は自らの延命を絶望的な侵略反革命戦争の遂行をもってなさんとしている。

私達は今こそ日帝の野望を打ち砕き、延命を断つべく、「日帝の侵略反革命戦争を蜂起―内戦へ」の総路線の下、狭山闘争の歴史的大勝利をかちとり、石川氏の奪還をかちとらねばなりません。

フォード来日阻止闘争

6・18第一回公判を闘いとれ

昨秋十一・一八フォード来日に対して先頭に立って闘い抜いた戦士に対する第一回公判が、六月十八日午後一時から東京地裁で行なわれようとしている。

われわれ戦旗派は、フォード来日―訪「韓」阻止の闘いを、①インドシナ敗勢に伴う日米共同反革命強化＝日帝のアジア侵略反革命戦争の策動との対決、②民青学連事件を一頂点とする韓国民衆の闘いの圧殺をめざす日米「韓」支配階級の結託に反対し、韓国民衆との国際主義的連帯の実現、③十・三一大暴虐に象徴される日帝の官僚・警察・軍隊的国家への反動化に対する革命的反撃、として闘いぬいた。

こうした闘いの正当性は、ベトナム―カンボジア人民の歴史的大勝利によってもあまりに明らかである。

われわれ戦旗派と「フォード共闘」に結集した諸党派・諸団体の労働者数千による、仲蒲田公園から羽田にむけた進撃に対して敵権力は危機に陥り、わが戦旗派三十余名をはじめとして「全員逮捕」

令下に二百人を逮捕し、数百人に重軽傷を負わせたのである。

こうした全く不当な弾圧に加えて敵権力はわが同志、中越・山田両君をはじめとして十余名を起訴した。

この許し難い攻撃に対する公判闘争を開始するに当って、われわれは以下のごとく目標をたてなければならない。

第一に、十一・一八フォード来日・訪「韓」が徹頭徹尾反革命的反人民的なものであり、わが闘いが正義性に満ちあふれていることを声高く主張し、日本・韓国・アジア人民の前に明らかにしなくてはならない。

第一に、十一・一八フォード来日阻止闘争に対する弾圧が許し難い不正であり、なかんずく、十六万厳戒体制を敷いていた等の危機意識が無差別逮捕・多数傷害に結びついたこと、及び逮捕がブルジョア法規に照らしてさえ全く不当であること、を主張し、ファッショ的暴挙を暴露しなくてはならない。

第三に、わが闘いの絶対的正当性、権力弾圧の全面的不当性をもとに、何としても無罪判決を獲得すべく主張し、奮闘しなくてはならない。

以上の三点を大方針としつつ、われわれは公判闘争に臨む。

第一回公判においては、起訴状に対する求釈明要求及び被告人冒頭意見陳述を通じて、わが総力を挙げて闘いぬいた闘争の正当性と権力弾圧の不当性を浮き彫りにし、公判闘争勝利へと一大布石を打ちぬくであろう。

5・13裁判闘争11グループへの「全員有罪」判決を弾劾する！

沖縄解放闘争をはじめ、日米両帝国主義に全力を挙げて闘いぬいている労働者・学生・高校生諸君！

あの七二年五・一五沖縄返還ー自衛隊派兵が、①沖縄人民を永久的に日米軍事基地に隷属させ、②その犠牲の上にアジア人民の解放闘争への侵略反革命戦争を準備するものであることを見ぬいたわが戦旗派が総力をふりしぼって闘いぬいた五・一三戦闘に対し、敵権力が許し難い報復を加えてきたことを明らかにし、反撃への決起を訴えます。

東京地裁はすでに九部岡垣及び二十六部船田によって、二名実刑を含む二十三被告全員への現住建造物放火未遂等重罪適用、懲役三年～四年の有罪判決攻撃を行っている。

更に五月二十二日、十一部鬼塚は、わが十一グループ被告に対して反革命判決を下したのである。

判決は、中村（信）、小川（幸）三宅、森をはじめとした全員に懲役一年六カ月～二年六カ月という許すことのできないものである。

沖縄返還粉砕闘争を圧殺せんとする敵権力数万の破防法弾圧体制に対して、お茶の水交番を含む機動隊に突撃しぬいた本隊から成っていった九部、二十六部被告団と異なり、現住放火罪なる重罪適用がなされなかった分だけ量刑は一見軽く見えるかもしれない。

しかし、この鬼塚判決はその判決理由において反動性を明らかにしている。

第一に、わが闘いの動機や主張について、沖縄返還粉砕闘争の意義について完全に黙殺したこと。

第二に、現場付近にいた戦旗派メンバーというだけで起訴ー長期拘留されたNさん、Yさんについて鬼塚は当初不十分として証拠1を棄却しながら、何らの容疑事実も特定せずに「角材をもった集団内にいた」とキメつけて有罪にしたこと。

第三に、検事側主張においてすら武器を所持していたとはされていないN君らに対して、裁判長は独断的に「所持していた」と明記したこと。

第四に執行猶予をつけた理由として、「首謀者ではないこと」を強調し、今後六部被告らに対する分断ー重罪判決を地裁の側からかけようとしていること、等である。

このような攻撃に対して、十一グループ被告団は断固として反撃することを決定し、具体的には小川君らの控訴、六グループ被告の支援、更には海洋博粉砕ー皇太子訪沖阻止に当面の全力をあげることをきめた。

なお、この被告団会議の席上、この一審闘争ー統一公判貫徹の意義を確認したが、唯一、足立グループによる被告や救対メンバーに対する暴力的敵対がその団結を乱したものとして批判が出された。

わが戦旗派の被告に対するだけでなく、九州その他、公判を一つの結集点として闘ってきた女性被告に対しても暴力的に敵対したことが明らかになり、大衆的批判の前に、足立グループは「以後、被告団には暴力的敵対は行わない」と自己批判したのである。

以上の十一グループの他、五月二十三日には六グループで、被告人質問の形で沖縄解放闘争の正当性の主張が行われた。とりわけ佐藤（一）被告は、狭山差別裁判闘争と結合して主張を鮮明にし、また大島被告は逮捕時における逮捕警官による度重なる暴行を暴露し、権力弾圧の一端を示したのである。

闘いの切り開いた地平を防衛し、大衆的反撃によって敵を追いつめるために、多数の公判闘争参加を訴えます。

夏期一時金の三割カンパを！

全国の戦闘的労働者・学生の皆さん！

三十年もの闘いに勝利したベトナム人民、そしてカンボジア人民の歴史的大勝利は、帝国主義に抑圧され、苦しめられている人々の闘いを鼓舞し、われわれには限りない希望を与え、日帝打倒の決意をますます燃え上らせています。

しかし、被抑圧人民の大進撃に危機感を抱いた日帝は、絶望的なアジア侵略反革命に延命を託し、アジア人民への敵対・抑圧を一層強めています。

海洋博をつうじた沖縄の反革命的打ち固めや、侵略反革命へ労働者人民を動員せんとする帝国主義天皇制攻撃の最大の焦点＝十月天皇訪米がそれです。

ベトナム・インドシナ人民と連帯して日帝と朴政権・米帝との反革命結合を打ち破る闘い、安保ー日「韓」体制打倒の闘いが今ほど問われている時はありません。

われわれ戦旗派は、昨年十一月米大統領フォードの来日に対しては、三十数名の被逮捕にも屈せず闘い抜き、韓国民衆との国際主義的連帯を深めてきました。

われわれは、それらの闘いをうけつぎ、とりわけ沖縄を反革命軍事基地として最終的に統合せんとする海洋博、帝国主義天皇制攻撃の最大の焦点＝十月天皇訪米には、血債にかけ総力で闘い抜く決意です。

そのような闘いを更に推し進めていくために、すべての労働者・学生の皆さんが圧倒的なカンパを寄せられるよう訴えます。

送り先　東京都新宿区番衆町十一ー八
コーポハピービルE1号
戦旗社
振替　東京二六一一〇

☆インドシナ革命戦争勝利万歳！
☆日韓閣僚会議粉砕！
☆天皇訪米絶対阻止！

6・15大統一行動

清水谷公園・午後二時

梅韜先生の不当解雇を粉砕し筑波大学体制を打倒せよ！

全都筑波共闘

梅韜先生の不当解雇を許すな！

昨年、労働者、学生の非難を浴びながら開校された筑波大学において、一人の中国人教師梅韜（メイ・タオ）先生が、今年の三月三日付文書をもって突如解雇された。

梅先生は、筑波大学の中国語専任外国人講師として、昨年四月の開校以来、筑波大の学生たちに中国語を教えてきました。　梅先生は、戦前、日本帝国主義が中国語を侵略戦争の武器として用い、中国人民をはじめとしたアジア人民を何千万人と虐殺していったという事実にふまえ、二度とそうしたことを繰り返さぬ様、人民の利害の上に立った中国語を提起され、かつ筑波大学において実践してきました。しかし大学当局は、筑波体制のモデル校＝筑波大学において、そのような中国語を教えることを許さず、今年三月三日付の文書でもって不当にも、梅先生を解雇したのです。

解雇の理由は「授業計画」の都合となっている訳ですが、大学当局の言い分は全くのデタラメです。　それは第一に、同僚の教官（彼らに対しても大学当局は、梅先生を支援したとして様々なイヤガラセをおこない解雇している）が学長宛に出した要望書にも「授業計画から言えば、梅先生は必要である」と書いてあり、このことは、梅先生の後任の教官が、新学期が始まった現在も未定であるということによっても明らかです。

第二に、梅先生は、五十年度の授業計画を提出せよとの大学当局の要求にもとづき、すでに今年の一月中に授業計画を提出ずみであり、更に、重要なこととして、この授業計画どおりに今年度のカリキュラムが作成されており、しかも五月六日の新学期開始以来、三度にわたり、梅先生自身、学生に対し授業をおこなったという事実からも、今回の解雇が全く不当であることは明白です。

そして更に許すことのできないこととして、梅先生の後任の教師として防衛庁の「中共」担当スパイ鈴木某をあてようとしていることです。

われわれは、何故、筑波大学が外国人専任講師を突如として解雇するという前例のない暴挙をおこなってきたのかを見ておかなければなりません。

それは、教育過程の全ての分野で、一連の教育再編が日本帝国主義のアジアへ向けた侵略反革命、とりわけ全韓国の「馬山化」と歩調を合わせつつ進行しているということです。

四・一七ブノンペン解放、四・三〇サイゴン解放そしてラオスでの勝利と、インドシナ人民は民族解放ー革命戦争の巨大な歴史的勝利をかちとった。武装し闘うアジア人民の総決起の前に日米両帝国主義とそのカイライ共は、破局的危機を更に深め、安保ー日「韓」体制の飛躍的強化をもって延命せんとしているます。

現在、日帝は韓国への新植民地主義的支配ー全韓国の「馬山化」ーのために、国民統合の最重要の環として教育における侵略反革命体制を構築しきらんとしているのです。　天皇訪米・皇太子訪沖をはじめとした天皇一族をかつぎ出しての帝国主義天皇制攻撃のなかで、日帝が大学教育を思いのままあやつり、教育におけるブルジョア独裁を徹底して貫徹し、戦前の学徒動員にみられるごとく学生を再度侵略反革命戦争へ総動員せんとしているのです。　たとえば「天皇を敬愛すること」をうたった「期待される人間像」、神話の復活、教育勅語の再評価にみられる天皇制イデオロギーの流布をもってブルジョア反革命思想を全社会の帝国主義的再編の打ち固めと一体化させつつ教育に注入しているのです。

これは、再度の大東亜共栄圏を夢見る帝国主義者共の侵略の歴史の正当化です。

日帝は、かかる差別排外主義イデオロギー攻撃を通じて、在日朝鮮人、沖縄人、部落民に対して差別・選別教育をなしきり、なおかつ生産関係から排除されている多数の被差別大衆の子弟から「学ぶ権利」さえも奪って、大学における差別・抑圧・分断支配を構造化せんとしているのです。

また同時に、「臨時措置法」「筑波大学法案」にもとづく権力ー機動隊の大学への出動、筑波大学の開校をテコに、二度と教育学園闘争の爆発を引き起さぬための治安弾圧体制、徹底した学内管理支配の強化を構造化させ、各大学への筑波型大学再編の攻撃をかけているのです。

こうした帝国主義的教育再編ー筑波体制化の攻撃の中で、そのモデル校としてある筑波大学において、中国語専任教師梅韜先生は不当にも解雇されたのである。

筑波大学の侵略反革命教育を許すな！

全国の先進的な学友諸君！

現在、筑波大学においては、侵略反革命の尖兵づくりの教育が、外部から隔離された原野の中で産軍学一体となって行なわれています。

体育を四年間必修とし、軍事教練の意味をもたせており、研究においても、医学専門群が防衛医大と密接に結びつきながら、毒ガス・細菌兵器の研究をおこない、農林技術センターにおいては東南アジアを日本の食料補給基地化するための研究をおこなうというような状況です。　更に、昨年の新入生合宿＝フレッシュマンセミナーにおいては、勝共連合（原理研）の機関紙〈世界学生新聞〉を全教職員・学生に配布するというような洗脳教育さえもがおこなわれているのです。

又、このような侵略反革命への教育を行なうために、一切の批判を封じ込める仕組ができあがっています。これが、筑波大の中枢管理システムです。要するにこれは、学長以下数名の副学長に教官の人事権、学生の管理を含む一切の権限が集中しているのです。

これは、軍隊的、警察的、官僚的な制度であり、「大学の自治」という幻想さえ許さないものです。　教官に対しては梅先生に対する見せしめ解雇をおこない、今後自分達の意にそぐわない教育をしないようにどう喝をかけ、学生に対しては企画調査室（筑波版CIA）なる下に二十四時間の監視体制を敷き、学生課のスパイを寮に常駐させ、右翼学生をスパイに仕立てていたるところに配置し学生の言動をチェックさせ、更に、許すことのできないこととして寮生の手紙を開封し、検閲し、私物検査をおこなっているのです。

まさにこれはアウシュビッツそのものであり、学生の自主的活動（自治会建設、社会科学系サークル）に対しても直接・間接の弾圧をおこない、一切の政治活動を禁止しているのです。

こうした状況は、単に筑波大に特有な現象として見ることはできません。日本帝国主義は侵略反革命へ向けた総動員体制をしき、教育再編においては、第二・第三の筑波大学を全国の各学園につくり出していこうとしている策動としてはっきりととらえ、これとの対決を梅先生の不当解雇撤回闘争に完全勝利することをもって実現していかなければならないのです。

全ての学友は、梅先生不当解雇撤回闘争に決起し、筑波体制を打倒せよ！

現在、日本帝国主義は破滅に瀕している。アジアへ向けた絶望的な侵略反革命戦争の遂行によって延命せんとしている。しかしながら、ベトナム人民・カンボジア人民の勝利、金芝河アピールに代表される韓国民衆の不屈の闘いは、人民を抑圧する者は必ず人民によって打倒されることを証明した。

こうした歴史の流れに対し、われわれ日本の学生は、被抑圧民族人民に敵対し、侵略反革命の尖兵になり下がるのか、それとも今こそアジア人民の不屈の闘いに学び連帯し、血債にかけて日帝の侵略反革命を阻止するのかが問われているのです。

われわれ全都筑波共闘は、梅先生不当解雇撤回闘争に総力決起し、筑波体制を打倒し、今秋天皇訪米絶対阻止の水路を切り開くことを決意しています。

足立グループの沖縄闘争への敵対を許さず 海洋博―皇太子訪沖を爆砕せよ！

ベトナム・カンボジア人民の英雄的歴史的勝利に呼応し、死の苦悶にのたうつ帝国主義とその手先共の絶望的攻撃をハネ返し闘っている労働者学生高校生諸君！

三・一金芝河アピールに応えた四・一九闘争、そして闘う沖縄人民との戦闘的連帯を打ち固めた五・一五沖縄海洋博粉砕・安保―日「韓」体制打倒の闘いを戦闘的に担いぬく中から、アジア人民との真の結合を創出せんとして闘ってきた全ての同志諸君！

われわれは五・一五闘争を、第一に、敗退する日米両帝国主義が最後の悪あがきとして韓国民衆へのファッショ暴圧をしき、朝鮮・インドシナ人民に対する侵略反革命戦争を開始するべく、沖縄基地を嘉手納への機能集中などによって強化していることに対する反撃として、第二に、海洋博を通じて沖縄人民の生活を破壊し、基地を強化し、反革命統合をなしとげようとしているのに対し、沖縄人民の血叫びに応えるべく闘ってきた。第三に、海洋博を機とする皇太子―皇族の訪沖、国家権力の官僚・軍隊・警察的再編とその頂点としての天皇元首化策動等、帝国主義天皇制攻撃の集約点たる天皇訪米をなし、また沖縄人民を初めとする被抑圧人民への差別支配を強めんとしていることに対決しぬいてきたのである。

こうした闘いの前進の中で、「戦旗派憎し」で野合する足立グループはますます孤立を深め、人民から見捨てられていくのに比例して反革命への道をころげおちている。足立グループは、この間、沖縄解放闘争の前進ではなく、分裂と破壊をもちこみ、差別暴言と背後襲撃のみをくり返してきた。

われわれが戦旗派の革命的再生をなしとげ、血債・猛省精神で貫かれた強固な隊列をつくりあげ、足立グループの誤りを徹底して暴露してくることによって、ついに彼らのホンネがニセ・センキに登場するに至った。

沖縄解放闘争の前進の中で、今や実践的破産をつきつけられた足立グループは、戦旗派に対する「理論」的批判でもってお茶を濁そうとしているのだ。ニセ・センキ三四八号の「戦旗派『海洋博粉砕闘争』の羊頭狗肉」なる反革命文章がそれである。

ここにおいて足立グループは、他の反革命分子と全く同様、最も悪質なデマゴーグへと仲間入りした。すなわち、

①十一・一八襲撃について「狭山闘争武装解除のすすめに対する正当な反撃」だと言い、「背後襲撃とは階級闘争の最前線で闘っている者のみが言える言葉なのですよ」などと何とか正当化しようとしている。しかし、足立グループが階級闘争の最後尾に意気消沈してついてくることしかできず、時には権力の手先にもなり下がるということは天下周知の事実である。

②「お前ら（＝沖縄人）が沖縄に帰ってきたら俺たちがたたき出してやる」とは「実は日本人に言った」などと全くのデタラメを重ねた上で、「沖縄人同志K君に対する反階級的行為」をわが戦旗派が行ったかのように言っている。だが事実や内容を全く言うことなく、「こう言えばわかるはずだ！」としか言えない現実こそ、デマは根拠がうすければうすいほど真実らしさを備えるということを知る足立グループならではの行為である。

③更に「戦旗派は沖縄闘争終息論を語っている」に至っては何をか言わんやである。

しかしわれわれは、この居直りとデマで固められた反革命文章の出現に満足している。階級闘争の荒波をうけて、ついに足立グループの本心が吐露され、国家権力と闘わず背後襲撃の正当化に腐心し、ウソでぬり固められたその結集点をさらけ出してくれたからだ。

反革命襲撃路線に対する大衆的糾弾と批判に直面した足立グループが、自己の思想・路線の切開と反省を放棄することによって、ますます純プロ主義とヤマト排外主義へ転落しつつあることをこの反革命文章は明白に示しているのである。

海洋博攻撃を「イデオロギー統合」に切りつめる足立グループの反動性

足立グループニセ「戦旗」三四八号「戦旗派『海洋博粉砕闘争』論文批判」（以下「批判論文」と略す）は、海洋博攻撃に対決するわが戦旗派の主張を以下のごとく要約している。

海洋博を契機として日本帝国主義は、①沖縄への進出―収奪をはかっている。日帝資本による沖縄進出の特徴は、沖縄経済発展の可能性を奪い、地元産業をなぎ倒し、軍事及びエネルギー基地への純化を迫り、人民の沖縄からの追放をめざしている点にある。

②日米軍事基地機能の強化。

③沖縄への同化―差別攻撃を強めようとしている。海洋博工事は至る所で沖縄文化固有の遺跡・文化財を破壊し、亀甲墓、旧家等が珊瑚礁と共に犠牲に供されている。（それに対して）沖縄固有の文化・習慣はそれが日常性に根ざしていると同時に、帝国主義による侵略と差別の歴史に対して反抗し団結する立脚点となってきた。

この「要約」にのみ立脚して「批判論文」は以下のごとき「批判」を投げかけている。「この主張は二つの点で誤りを犯している。①に示されている沖縄の地域ブルジョアジーの美化」「現実に進行しているのは沖縄地域ブルジョアジーの買弁化である」③について

は「現在の日帝の攻撃＝沖縄人を侵略反革命の尖兵として動員するために『沖縄的なるもの』をも積極的に包摂せんとしていることを見るならば、『沖縄的なるもの』すべてが防衛されるべきではない」と批判し、防衛されるべきでない「沖縄的なもの」として、「『男逸女労』的な思想が『買春』の根源としてあげられている。

以上の批判のあと、自らの海洋博の位置づけを示している。いわく「日帝の沖縄に対する攻撃・海洋博にかけた日帝の真の狙いが、天皇を頂点とした人民支配体制の確立、その事による沖縄人民の侵略反革命の尖兵としての動員にある。」

足立グループの主張はこれにつきる。

この内容に批判を加える前に、この「批判論文」に現われた足立グループの作風について一言しておこう。

まず不正確な引用に現れる疎外された批判である。いわゆる③の攻撃＝同化攻撃について、われわれは、はっきりと「海洋博工事による沖縄固有の文化・習慣の破壊と、沖縄人意識解体策としての日本民族意識の教育・マスコミ等を使っての大々的な注入」との闘いを訴えている。そして海洋博工事が遺跡を破壊し、沖縄文化に攻撃を加えていることを指摘したのだ。この点の反批判は後述するとしても、「戦旗派は遺跡破壊だけをもって同化攻撃だとしている」というのは歪曲された批判である。戦旗派の沖縄解放―海洋博粉砕闘争を何とかして批判しなければ、ということだろうが、そのような「誹謗・中傷」のレベルは足立グループの低水準を示す以外の効果をもたない。

ともあれ反批判を三点にわたって加えていこう。

第一に、足立グループの「反革命的統合終焉論」に伴う、①基地強化との闘い、②生活破壊・政治的経済的抑圧との闘い、③文化・土地等沖縄人民固有の財産の破壊等の無視と海洋博粉砕闘争の「天皇制イデオロギー攻撃反対」への一面化である。

第二には、「沖縄地域ブルジョアジー打倒」論の犯罪性＝純プロ主義・カクマル主義である。①帝国主義抑圧民族の党（足立もそうだ）が、沖縄人民の団結につくすのでなく、逆にその分裂をあおること。②現実に進行する日帝独占体による沖縄零細企業破壊を見ないで、逆に沖縄地域ブルジョアジーとやらを打撃対象にすること、このような「理論」は理論一般でなく、その果す客観的役割を問題にせざるをえない。

すなわち日帝独占体の沖縄進出を美化し、沖縄人民の目をその日帝にではなく、「地域ブルジョアジー」に向けさせる役割である。

第三の批判点としては、「沖縄的なものは日帝の沖縄統合に利用されるから防衛される

べきでない」という主張の帰結としての「沖縄文化財破壊肯定論」の許し難いヤマト排外主義である。

まず、海洋博攻撃を「イデオロギー統合」に切りつめる足立グループの主張について。

先に「批判論文」から引用したごとく、足立グループは、海洋博攻撃を「天皇制を頂点とする人民支配、侵略反革命への動員へのイデオロギー攻撃」としか見ない。ニセ「戦旗」を読むかぎりそうとしか考えられない。

だがそれはあまりに一面的というものである。問題なのは、第一に海洋博にかけた安保ー日「韓」体制強化の策動、日米軍事基地撤去の闘いを無視していることだ。彼ら足立グループの「海洋博の位置づけ」には基地強化との闘いはスッポリとぬけおちている。

インドシナ革命戦争の歴史的勝利と韓国民衆の決起に恐れおののく帝国主義が、沖縄基地を更に強化し、沖縄人民を更に基地の犠牲に供さんとしていることなど彼らの眼中にはないのだ。

しかもスッポリとぬけおちているのは安保ー日「韓」体制との対決だけではない。海洋博を通じた沖縄経済の日帝による新植民地主義的ともいえる収奪や、生活破壊も見ようとしない。それどころか、「沖縄人民の生活破壊＝博害に反対しているのは弱々しい」などと、沖縄人民の闘争決起の一原点を小ブルジョア的に嘲笑するのである。

こうした態度、海洋博攻撃に対する、①基地強化、②生活破壊、での武装解除と「イデオロギー統合」への切りつめは偶然ではない。ニセ「戦旗」のP9では「七二年返還で、沖縄の反革命統合をなしとげた日帝は、沖縄人民を排外主義イデオロギーの下に屈服させない限り、狙いは完遂しない」と語り、反革命統合終焉論を公然と語り、海洋博攻撃をイデオロギー統合としてしかとらえないのである。

だが事実は足立グループの観念世界とは異なる。反革命統合は現に進行中であり、沖縄人民は死活をかけて闘っているのである。そして足立グループの「反革命統合終焉論」は紛れもなく、日帝と闘う沖縄人民の足を引っぱり、日帝を利しているのだ。

海洋博攻撃をイデオロギー統合に一面化する足立グループの犯罪的役割はもはや明らかである。更に、問題をイデオロギー面に切りつめ、その他の問題に目をつぶらせようとすることの犯罪性を、「地域ブル打倒論」と「文化破壊容認論」の批判によって弾劾しよう。

『地域ブルジョアジー打倒論』に明らかな純プロ主義者の沖縄人民分裂策動

海洋博を一大契機とした日帝独占体の沖縄進出ー収奪について暴露したわが戦旗派の主張に対して足立グループは、①沖縄地域ブルジョアジーの買弁化を美化している、②日帝独占体が沖縄の経済的発展の可能性を閉ざしている等と言うのは釣魚台略奪の策動や海洋博誘致を承認するに等しいと批判する、

この「批判」はまず理論的にまちがっている。だがそれ以上に問題であるのは、その内容が何を言わんとしているのか、ないしはその「批判」の客観的な役割である。つまり、足立グループは日帝独占体の沖縄収奪を完全に容認しているのだ。

実際、足立の「批判論文」中、日帝独占体の沖縄収奪は一言たりとも語られず、「地域ブル」の問題ばかりを取り上げている。あげくのはてが「沖縄経済発展が抑圧されてると言うと、それなら海洋博誘致を、と言われるから、日帝独占体が沖縄経済発展の可能性を閉ざしているとも主張してはならない」と言うことになる。これほど日本帝国主義を利し、現実の沖縄人民の生活活動に敵対する主張はまず見当るまい。

もう少し検討してみよう。

まず、沖縄経済において現実に進行する主要な事態は、われわれが主張するごとく、日帝独占体による沖縄人民収奪であろうか、それとも地域ブルジョアジーの買弁化であろうか。

冷厳なる事実を見ることから始めよう。

第一に沖縄産業を分析するとすぐに特徴をつかむことができる。①従業員五人以下の零細事業所が全事業所の七五％を占め、百人以上のものはわずか一・八％にすぎず、平均四・三人と小規模なこと。

②業種別では製糖・パイン罐詰を中心に、食料品加工が四八％（出荷額で四六％）を占め、つぎに窯業土石製品が一〇％、出版・印刷が八％、金属製品八％、衣服その他繊維製品が五％といった具合に軽工業、しかも資源加工業種に限られている。

③沖縄の製造工業は生業型の零細企業が多く、個人企業が九〇％以上を占め、法人企業はわずか六％。

④第三次産業従業者が五一％と異常に多く、中でも米軍への直接雇用者四万、日米軍の消費に生計を求めるサービス業・卸小売業・建設関係で計十万人をこえ、全就業者の二五％に相当する等、基地依存性が強い。

⑤大資本の多くはもともと日米独占体の進出企業である。六〇年代から日糖、名糖などの製糖会社、パインでは伊藤忠、三菱商事等、が進出して独占的支配を固め、地元資本を駆逐していた。清涼飲料などでの米資本も同様である。返還後はしょう油などでキッコーマンが地元業者をシェアにおいて逆転、引き離したのを初め、食品加工という最後の分野でも沖縄産業は圧迫され、倒産に追いこまれている。

⑥農業の生産性は低く、一戸当り農家所得は本土平均の五五％で、しかも農家所得は三四％にすぎず、就業人口で三二％を占めながら、所得では一一％しかなく、極度に貧しい。出稼ぎ等の兼業所得でやっと口すぎをしている状態であり、長く米軍にとって産業予備軍としてシワよせされてきたことを示して余りある。加えて日帝が政策的におしつけてきたさとうきびのモノカルチャ経済である。さとうきび農民は、本土の米作農民のような食管制度すらもたず収奪されてきたのだ。

このような沖縄経済が、日帝に統合される時に発生する事態の中心が、「地域ブルジョアジーの強力化」でありうるはずがあろうか。日帝独占体が沖縄をのみこみ、新植民地主義的に収奪をほしいままにせんとするのではないだろうか。

事実は頑固である。

海洋博財政支出は三千億円をこえ、沖縄には消費ブームが訪れていると言われる。（多くの人民はその陰で抜群のインフレと、五・一％、二万一千人の失業に泣かされているのだが）

この消費物資は、その九割までを「本土」から購入しなくてはならないのだ。

戦前、日帝によってさとうきびモノカルチャに落しこめられ、戦後は全くの焦土の上に基地に包囲され、沖縄での産業資本の成立の可能性はほとんど閉ざされていたし、資本蓄積は不可能であった。

そんな沖縄が、日帝に統合されたら急に資本蓄積をとげ、「地域ブルジョアジー」として支配階級を構成しうるものだろうか。

断じて否である。

第一に、重化学工業製品、高級消費物資等地場にない分野で日帝が席捲する。

更に決定的に重要なのは、ほとんどが零細家内企業でしかない沖縄人民の生業をおしつぶし圧殺している。

そうなった例を、海洋博にひきつけて建設業でみることにしよう。

この三年間に「本土」から沖縄に進出した企業数は千八百社ほどにのぼるが、主流はなんといっても大手建設業である。

沖縄にとっては巨額で、一人当りにすると四十二万四千七百円になる海洋博財政投入を狙って集まった建設業は、海洋博関連工事がすめば潮のようにひいていくであろう日帝独占体の代表である。

沖縄での「本土」の大手建設業は一億五千万円以上の受注が可能なA級が八十二社あるのに対し、沖縄資本は、買弁ブル＝国場組や「合弁」組を含めても十社にすぎない。入札の九割以上が、そのために「本土」企業に占められている。全沖縄が掘り返されている観があるのに、建設関係では沖縄労働者は四割にしか達していない。賃金も差別され千円の開きはある。

つまり、沖縄に巨額の財政投入が行われたが、受注、雇用のうまみは全て日帝独占体がもち去り、沖縄資本は一時期ののちには倒産においこまれるのである。

あらゆる業種の中で日帝のシェアが増し、もともと零細な沖縄産業は太刀打ちどころかなぎ倒され、破産ー失業においこまれている。これは明らかに現実なのである。

日帝は沖縄地元産業の資本蓄積を許しはしない。うち続く公害企業等の進出、独占体の商品販売戦を通じ、新植民地主義的な収奪機構が沖縄を覆い、沖縄経済の発展の可能性は日帝によって閉ざされているのだ。

問題は明らかになった。沖縄の資本の特徴として、①絶対的零細性、②日々に強まりゆく日帝独占体による収奪と抑圧、の二点を見ない者は観念論である。

かかる零細業者達に「地域ブルジョアジー打倒」の痛罵を浴せ、日帝の下に追いやろうとする足立グループは、沖縄人民の内部に犯罪的な分裂をもちこむ役割を果しているのではないだろうか。

零細にして家族労働的色彩の強い製造業者達に対しては、足立グループの主張とは正反対に評価すべきだ。①原理的規定からすれば「ブルジョア」に属するかもしれないが、そのような本質規定をもって生き苦しむ人々をなで切るのは、文字通り純プロ主義であり、沖縄の現実に対しては日帝の尖兵の役割を果すこと、②日帝独占体が経済発展の可能性を閉ざしたことを、足立とは逆に強調し、彼らの未来が労働者農民、日本労働者人民と共に日帝を打倒することによってのみ開かれることを説得し、わが団結の一対象として獲得し

なくてはならないし、沖縄の苛酷な現実はそれを可能としていること、この二点を確認しなくてはならない。

そもそも「地域ブルジョアジー」なる規定はあの反革命カクマルの主張であり、革命的潮流は、これをその戦闘的闘いの中で粉砕してきたのだ。青婦協路線や組合主義で共通するといっても、カクマルに加担するとはあきれ果ててしまう。純プロ主義の本質は争えないものだ。

日帝による文化破壊ー同化攻撃に加担するヤマト排外主義＝足立グループ

足立グループはまた、①沖縄固有の文化・習慣は、その上に天皇制が君臨していたこと②現在の日帝の排外主義の内容が、ブルジョアジーの側から「沖縄の特殊性」をあおっていることを主張し、結局、日帝の排外主義攻撃を助けるから沖縄固有のものは防衛されるべきでない、と言う。

こうした足立グループにまずたずねよう。きみたちは文化破壊、遺跡や金武湾の日帝による破壊に賛成なのか否かと。「尚王朝が日帝のカイライだった」「沖縄文化が日帝の排外主義に利用されるからその防衛に反対」などという言辞から判断する限り、日帝による沖縄破壊の尻おしをはかっているとしか理解できないのだ。

沖縄破壊を美化し、日帝のブルドーザーにでもなろうと考えているらしい足立グループの諸君とは異なり、なぜわが戦旗派は、沖縄文化破壊ー反革命統合攻撃と闘うのか、次の二点から明らかにしよう。

第一に、日帝の反革命統合に対して最も根底的に対決しぬく沖縄人民の強固に打ち固められた〈沖縄人意識〉〈反ヤマト意識〉の防衛、発展にとって文化ー習慣等〈沖縄的なるもの〉は切り離しがたく結びついており、これへの攻撃は、沖縄人意識解体をはかっているということである。

〈沖縄人意識〉のもつ、この日帝支配下の沖縄解放闘争における決定的意義については、足立グループといえども全否定してはいないようだが、〈沖縄的なるもの〉全般を否定する場合、たとえれば外堀を埋めるに等しいのである。

考えてもみよう。〈沖縄人意識〉とは何か。それは決して抽象や観念にとどまるものではなく、日々再生産される根拠を持っている。日米帝の収奪ー抑圧が、存在しているという現実に対して、沖縄人民は団結しなくてはならぬということがその根拠である。この場合①日帝による直接、「間接」の苛酷な支配とそれに対する抵抗の歴史を日々に確認すること、②外敵の支配をハネのけることによって沖縄は平和と解放をかちとりうることの確信を深めること、③現に外敵によって進行されつつある共有財産破壊、環境・生活破壊を許さないこと等、は同化攻撃ー融和主義との闘いにとって決定的に重要である。

足立グループのごとく、日帝の日々の沖縄破壊ー沖縄人民の沖縄からの追放に対して容認し、観念的に「天皇制イデオロギー＝排外主義攻撃反対」を叫ぶだけならば、〈沖縄人意識〉は日々に再生産される基盤を失ってしまう。まさに段階的武装解除を沖縄人民に勧めているのが足立の役割である。

沖縄破壊ー反革命統合攻撃と闘わなくてはならない理由の第二は、その攻撃が日帝によって沖縄人民にかけられているからである。

自己が抑圧民族の一員であることを忘却し、〈沖縄的なるもの〉の功罪について〈高み〉からアーダコーダと評論した結果、沖縄文化・習慣については「日帝に利用されることもあるから防衛すべきでない」などという。骨の髄までヤマト排外主義に犯された者でなくて吐きうる言辞であろうか。

この連中は現に日帝が沖縄破壊ー反革命同化攻撃に奔走していること、沖縄人民がこれと闘っていることを想起しようともしない。

沖縄人民が必死に防衛せんとしているものを嘲笑し、「日帝に利用される恐れがある」からというインネンをつけ、他ならぬ日帝の走狗となって沖縄人民からこれを奪おうとしているのが足立グループの真の姿である。

こういうのを沖縄解放闘争への反革命的介入と呼ぶのである。

この思想は、沖縄人への度重なる襲撃等においてすでに実証ずみではあるが、帝国主義抑圧民族の一員として、いかに日本人による沖縄差別と闘うのか、自己をもどう点検するのかをぬきにしての、「とにかく現地へ」式の自衛隊ばりの沖縄「上陸」についてもその反革命介入としての本質は次々に暴露されている。沖縄解放闘争を闘う諸団体に対する中傷と狭小なセクト主義によって孤立し、権力弾圧をうけるやすぐに洗いざらい自白する等「本土」左翼への不信をかきたてる役割のみ果している。

足立グループの「沖縄闘争」の実践的破産はこれにとどまるものではない。

五・一五闘争では全国動員したにもかかわらず、四十弱しか結集できなかったし、五・一三公判闘争でも破産している。

七二年五・一五沖縄返還粉砕ー自衛隊派兵阻止闘争＝五・一三戦闘の意義を断固として防衛し、海洋博粉砕を初めとする沖縄解放闘争へ進撃すべき統一公判闘争は、十一グループへの判決によって一審闘争の後半に入っているが、この過程で足立グループの統一公判闘争に対する反革命的敵対が完全に破産した。

足立グループは、公判の度にわが同志Iや K・T等に公安刑事等の面前、裁判所廊下や食堂において暴行を加えてきた。

この暴力的敵対の尖兵であったアベ（ヤ）が、判決が近づくや急にブル転し、他の公判でまず転向宣言をやって「改悛の情」とかを認めてもらったあと、破廉恥にも五・一三統一被告団ー弁護団に対して、「情状ー反省の弁護をしてほしい」と申入れてきたのだ。

被告団ー弁護団は、判決当日厚顔にも姿を見せたアベのこの要請を拒否し、「五・一三戦闘の防衛ー重罪適用粉砕」の公判闘争方針を守りぬいた。

問題なのはこのアベの裏切りに対して足立グループのNら全員がとったアベ擁護の対応である。敵陣営に寝返った上、その敵性を統一被告団にもちこもうとするアベと一線を画さないばかりか擁護しようとするところに、実は足立グループ総体の腐敗がある。彼ら総体の「アベ」化があるからなのだ。アベ及びアベと全く同じく腐敗し、人民を裏切った分子を多くかかえながら、反戦旗の一点でのみ野合しているのが足立グループの実状なのだ。

十一グループ公判をめぐる足立グループの破産を更に鮮明にしたのが、九州出身の女性被告に対するNらの暴行である。「全員控訴という方針に反対した」「足立グループを批判した」等と全く独善的な言い分で被告をなぐりまわっているのだ。

現在の沖縄にかけられている攻撃と最も戦闘的に闘いぬく展望を一切欠落した「全員控訴」なる方針は、九グループ、二十六グループ、十一グループを通じて四十数名の被告中数人しか結集できず、またそもそも結集するはずはないのだ。

五・一三戦闘の意義と公判闘争を語りながら、これほど五・一三戦闘をふみにじる行為はない。

一審闘争でも敵前の度重なる暴行によって弁護団にも敵対し、救対責任者は次々と病気を理由にいなくなり、判決が下ると被告団事務局を僭称してN弁護士らをあざむき、保釈金を使いこんだりした足立グループ。

十一グループ女性被告らの収めたはずの被告団費用が統一財政責任者にとどかず、それを追及した被告に対して「控訴審闘争に敵対するのか」と居直り、そのような無責任を批判されるや乱暴を加えた足立グループ。

こうした実践的腐敗と先の海洋博「理論」での「地域ブル打倒」「沖縄文化破壊容認」に見られる日帝尻おしは分かちがたく結びついている。

五・一三公判闘争の全過程をも、その闘争精神はもとより一切の任務を責任をもって領導しぬいてきたわが戦旗派は、六グループの一審闘争、更に控訴審闘争の統一的革命的推進を実現しぬく努力と共に、腐敗しきった足立の分裂策動、暴力的敵対を許さず闘い続けなければならない。

沖縄海洋博粉砕ー七・一九皇太子訪沖阻止の大爆発を克ち取れ！

腐敗せる足立グループを、沖縄解放闘争の業火で焼尽し、戦旗派の革命的前進を克ち取れ！

（3頁より）

ても許さぬ闘いとして打ち抜かれなければならない。

そして第二に、朝鮮危機をめぐって米・日帝国主義の沖縄の侵略反革命前線基地ストロングポイントとしての強化に向けた七月沖縄海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止へ、五・一五闘争の成果をふまえおしあげられるべき闘いとして打ち抜かれなければならないということである。

そして第三に、朝鮮・アジアを巡る日米帝国主義の侵略反革命戦争へ全体重をかけて策謀されている天皇訪米絶対阻止の第三波闘争として、まさしく七五階級闘争の最大の生念場、安保ー日「韓」体制強化の環、天皇訪米をアジア人民への血債にかけ、絶対阻止する闘いにしぼり上げられるべきものとして闘い抜くことである。

全ての労働者人民諸君！

インドシナ革命戦争勝利万才、日「韓」閣僚会議粉砕、天皇訪米絶対阻止第三波大統一行動、六・一五闘争に決起せよ！　七・一九・二〇海洋博粉砕・皇太子訪沖阻止闘争に起ちあがれ！

日帝の官僚的・警察的・軍隊的支配の強化と対決し 10月天皇訪米を絶対阻止せよ！

はじめに

一九七五年四月十七日プノンペン陥落、同三十日サイゴン陥落、それに引き続くラオス、パテト・ラオ（愛国戦線）のビエンチャン進攻と、アジアにおける民族解放ー革命戦争の雪崩のごとき勝利は、米帝を軸とした帝国主義の世界支配の根底的危機と、世界革命の巨大な接近を、全世界のプロレタリアート、被抑圧民族、人民に告げ知らせている。

アジアにおける革命戦争の圧倒的勝利は、「一九三〇年代へのラセン的回帰」とは根本的に異質な地平に階級闘争を押し上げている。

「ファシスト共に革命派が打ち負かされ、世界中の帝国主義者がその権益を求めて人民を戦争にかりたてることなど、もはやできない」ところにまで、人民の力は成長し、帝国主義者は危機にみまわれている。そして、ベトナムで起きた一切こそが歴史の流れであり、時勢であることを、われわれははっきりと確信することができる。

従って、日本帝国主義を打倒しぬく責務を負っている日本プロレタリアート人民の向かうべき方向は、今や鮮明であり、ますます重大なものとなってきている。

体制的危機を、必死に乗り切らんとする帝国主義者どもの、なりふりかまわぬ自殺的な侵略反革命戦争の準備と、侵略反革命体制構築の暴力的強化の攻撃をみすえ、これと真正面から対決し打ち砕く闘いに進撃していかなければならない。そして、アジア人民の正義の革命戦争に徹底して学びきり、これと固く結合した闘いに決起することである。

アジア人民の不倶戴天の敵である、日本帝国主義の侵略反革命戦争への突撃をこっぱみじんに打ち砕くことこそが、われわれの任務であり、帝国主義者を更なる体制的危機へ追い込むことによって革命勝利の突破口を何としても切り開かなければならない。

日本帝国主義は、内外におけるプロレタリアート人民の総反撃と、石油危機によって醸成された経済的危機の嵐の中で、六〇年代を通じてなしてきたブルジョア独裁のみせかけの「安定」的支配を、もはや貫徹することができなくなるところにまでいたっている。

六九年安保決戦へと登りつめた、激烈な武装闘争の進撃を、破防法弾圧攻撃の暴力的支配によって封じ込めたごとく見えたにもかかわらず、逆に革命的左翼を先頭にした闘うエネルギーは、市民社会深部にくい込み、被抑圧民族・人民の日帝支配に対する怒りの反撃と固く結合して、新たな日帝打倒の巨大なうねりを噴出させている。反革命カイライ政権の暗黒の独裁と米帝国主義の莫大な軍事力にもかかわらず、アジア人民が自力で、カイライどもを葬り去り、アメリカ帝国主義をみじめな敗北に追いやっている。このような、国内被差別大衆、プロレタリアートの決起、アジア人民の巨大な反撃の真っただ中で、日本帝国主義は、いかなる策動によってこれに対応せんとしているのか。

帝国主義者にのこされている道は、更なる侵略反革命戦争への強権的突入をもってアジア人民抑圧、搾取をなし切る以外にないのである。いつ、いかなる時にも、米帝国主義のアジア反革命介入を支え、カイライ政権を支え、全韓国の「馬山化」をはじめ凶暴な侵略反革命の道を突進しつづけた日帝の歴史が、はっきりとそのことを証明している。

しかしまた、侵略反革命戦争への道は出口のない道であり、更なる体制的危機の矛盾を拡大再生産し、ベトナム革命戦争を数倍・数十倍する巨大な人民の反撃によって、息の根を止められる以外にないことも確実である。

日本帝国主義の必死の人民支配、アジア侵略反革命への強権的な突入は、帝国主義天皇制攻撃として、十月天皇訪米の強行としてなされんとしている。第二次帝国主義戦争の野蛮なアジア人民殺りくの張本人であり、超A級戦犯である天皇ヒロヒトを、新たな粉飾をほどこしてブルジョア政治過程の前面に登場させ、侵略反革命体制強化ー排外主義的人民統合への突入と、アジア人民への公然たる敵対を宣言するこの日帝の暴挙こそ、われわれの見逃がすことのできない帝国主義者の野望をあらわしている。

アジア人民は、そして韓国民衆、沖縄人民は、日本プロレタリアート人民がこれに対し、いかに立ち向かっていくのかをジッと見守っていることをかた時も忘れてはならない。

「日帝の侵略反革命を蜂起ー内戦・世界革命戦争へ！」の戦略的総路線を、今こそ一歩一歩物質化させていくことが、日本プロレタリアート人民に問われている。七五年階級闘争の最大・最重要の課題である、帝国主義天皇制攻撃との全面対決、十月天皇訪米絶対阻止の断固たる貫徹を、アジア人民の血債にかけて、「断固とした悲壮な覚悟をもって」なし切らねばならない。

議会の空洞化と行政権力の肥大化の目論み

第二次帝国主義戦争後、帝国主義世界支配の盟主として登場した米帝国主義を軸にした共同反革命体制の網と、ブレトン・ウッズ体制を軸とする経済体制が、七〇年を前後して次々に破産をとげてきている。

現代過渡期世界に雄々しく登場した第三世界人民の革命戦争の嵐は、「強大」な帝国主義を次々に打ち破り、ドル危機から全面化したブレトン・ウッズ体制の崩壊、各国帝国主義間の経済的利害の対立は、石油ショックというダブルパンチをまともに受けて、ますます経済的危機を生み出している。そうした危機を、とりわけまともに受け、激しい体制的動揺を深めているのが日本帝国主義であることは、明らかである。

そのことのあらわれは、第一には、六〇年代から七〇年代にかけてのスターリニスト＝日共にとってかわる革命的左翼の登場であり、安保粉砕！　日帝打倒！　の刃が日帝のノド元に突きつけられたことである。

第二に、戦闘的部落大衆をはじめ、帝国主義支配のしずめ石として、最底辺で抑圧されていた被差別大衆が、こぞって帝国主義との対決の最前線におどり出たことである。

第三に、アジア人民の革命戦争、民族解放の闘いの爆発が、アジア侵略反革命を延命線とする日帝と真正面から激突するに至ったということである。

アメリカとの貿易と、アジアへの侵略反革命、とりわけ朝鮮特需やベトナム特需という強盗的収奪によって肥え太ってきた日帝にとって、米帝のドル危機による自国経済保護政策により、利害の対立が顕現し、アジアに対する軍事的、経済的肩代りを要求されている。そして、ベトナムをはじめとする革命戦争の勝利という事態の中で、「韓」国、台湾等を最後の生命線とせざるを得ないところに追い込まれたのである。

米帝のアジアにおける軍事的敗北は、米帝以上に、日帝にとっては重大であり、アジアにおける帝国主義的権益は減少せざるを得なくなっている。

第四に、したがって最後の生命線を何としても維持するために、安保体制の一方の担い手である米帝に代って、アジアに対する軍事的支配を準備しなければならず、日「韓」体制を強化して腐敗した朴政権を支え、全韓国の「馬山」化を強化して韓国民衆に敵対する以外に道はなくなっているということである。

第五に、以上の内外の階級攻防の進転の中で、議会制民主主義の幻想をふりまきつつ、自民党支配を通じてブルジョア独裁を貫徹してきた日帝は、六〇年代の高度経済成長の強行の中から生まれた、農民層の分解→都市プロレタリア化によって、伝統的保守基盤の農村が解体され、議会における後退が決定的となっているということである。

総じて七〇年代においてはっきりあらわれたブルジョア支配のこれまでにない危機に対して、新たな支配体制への転成として、帝国主義天皇制攻撃が人民に対してかけられてき

ているのである。

とりわけ議会においては、三権分立なるブルジョア独裁の巧妙な陰ぺい手段を用いて、議会の徹底的空洞化と行政権力による支配の全面掌握を画策している。

そのことは、第一に、中央集権化された官僚機構の完成と、それを基礎に人民一人ひとりに至る完全な掌握である。

去る三月七日の衆議院内閣委員会に「許可・認可等の整理に関する法案」の中にひそかにもぐり込ませて提出された「外国人登録法の一部改正」なるものにも見られるごとく、「行政の簡素化」なる名目のもとに、在日朝鮮人一人ひとりに対する実質的な弾圧を目的とした策動が準備されたことにはっきりとあらわれている。又、文部省を通じた筑波大攻撃に見られる、教育の帝国主義的再編や、議会を無視した、各種「通達」による市民社会末端に至るまでの反革命支配の貫徹が行なわれている。

第二に、帝国主義軍隊＝自衛隊の強化を通じた、日・米・「韓」反革命体制の強化である。憲法の実質的骨抜き化、安保の「事前協議制」の骨抜きは言うまでもなく、ギマン的な沖縄「返還」を通じた、自衛隊の沖縄派兵、海洋博をテコとした沖縄全島軍事基地化、そして日・米・「韓」共同軍事行動の公然たる強行である。

第三に、刑法改悪、実質的破防法弾圧体制の強化、公安警察の肥大化、司法の全面的反動化である。

六九年安保決戦の激闘に対して、民主的ポーズをかなぐりすてた権力は、破防法適用をもって革命的左翼に凶暴な弾圧をかけてきた。しかしながら、人民の闘うエネルギーを決して押し止めることのできなかった支配者どもは、十・三一大暴虐にあらわれるごとく、裁判の民主的ポーズをかなぐり捨てて、徹頭徹尾反動的な差別無期判決をかけてきたのである。

又、爆弾闘争対策と称して強化された、アバートローラー体制をしいて全社会的反革命監視網を作り、公安警察の実質的強化＝CIA化を着々と推し進めている。十一月フォード来日における十六万厳戒体制、エリザベス来日における厳戒体制と矢継ぎ早に破防法弾圧体制を強化し、十月天皇訪米準備を目論んでいることを、われわれははっきり見ておかねばならない。

第四に、社・共人民戦線派を議会内にまき込み、帝国主義支配の「左」足として利用せんとしていることである。

「過激派」狩りを口実にした、破防法の適用、「火炎ビン」立法成立への社・共のまき込み、そして沖縄「返還」・「祖国復帰」のブルジョア的集約に対する迎合、屈服は、ますしくそうしたことの証左である。

第五に、以上のことと一体化したものとして、自民党支配の後退・動揺を、天皇をかつぎ出し、ブルジョア政治過程の前面に押し出して、反革命人民統合をなさんとしていることである。

天皇の元首化攻撃としての、フォード来日における天皇ヒロヒトの宣伝や、エリザベス来日におけるそれ、そしてまた、海洋博「名誉総裁」としての皇太子訪沖、十月天皇訪米は、帝国主義者の凶暴な反革命的野望をはっきりとあらわしている。

今や帝国主義天皇制攻撃との全面対決、十月天皇訪米西山の闘いは、われわれにとって避けて通ることのできない重大な階級攻防の環となっていると言わねばならない。

反共・反革命イデオロギー攻撃としての帝国主義天皇制攻撃

支配の危機にあえぐ帝国主義者にとって、これまでの議会制民主主義をかなぐり捨て、露骨な反共・反革命イデオロギー攻撃の全面的開花によって人民統合を画策することは、絶対に必要なのである。

そのことはますます拡大する帝国主義の腐朽性の下、部落差別攻撃、在日中朝人民に対する差別・分断・同化攻撃、沖縄人民の反革命統合の中にはっきりとあらわれている。

昨年狭山決戦に決起した十二万大衆の意志をふみにじり、石川青年を先頭とする差別糾弾の血叫びをあげる部落大衆を機動隊包囲の下でふみにじり、十・三一大暴虐をかけてきた日帝国家権力は、日共を「左」足として、徹底した「反暴力」キャンペーンによって部落大衆に対する差別攻撃をますます強化し、人民分断支配をなさんとしている。

在日朝鮮人に対する弾圧として画策された「外国人登録法」改悪は、昨年八月、朴反革命カイライ政権との間で取りかわされた椎名密約に基づく、許すことのできない朝鮮人弾圧攻撃である。

強制連行によって日本にかり出され、徹底した差別と搾取の下においこまれてきた在日朝鮮人に対して、入管体制攻撃をなし、民族教育を弾圧して日帝への同化を強要し、それと闘う部分を朴に売り渡すという、許すことのできない日帝の暴挙を、われわれは絶対に見逃がすことはできない。

沖縄人民に対しては、ギマン的な「返還」＝「復帰」を通して、沖縄のアジア侵略反革命前線基地化を目論むばかりか、海洋博の開催によって皇太子を訪沖させ、沖縄人民に対して日帝への完全な同化をせまらんとしている。

この露骨な帝国主義天皇制攻撃に対して屋良「革新」知事は、「国際的な行事だから、国際慣習に従うべきだ」などと述べ、完全に帝国主義天皇制攻撃に屈服するのみか、海洋博攻撃の水先き案内人になりさがってしまっている。このようなことを、心ある沖縄人民は許しておくだろうか。決して否である。

帝国主義天皇制イデオロギー攻撃は、そうした人民分断・同化攻撃の集約点としてあることは、今や明白である。

「期待される人間像」（一九六六年）や、教科書への神話の復活、日の丸、君が代の斉唱にみられる天皇制イデオロギーの流布は、形を変えて強化されている。又、「靖国神社」法案や紀元節の復活、天皇の元首化策動、元号の法制化等々、矢継ぎ早に出される天皇制イデオロギー攻撃は、七〇年代に突入して、ますます強力に打ち出されてきている。

これらの一切が、内外の被抑圧民族・人民の決起と革命的プロレタリアート人民の総反撃を前にして、危機の乗り切りをはからんとする日帝の、必死のまき返しであり、全面的なアジア侵略反革命戦争へ向けた反革命人民統合ー排外主義への動員の重大な役割りを担っているということである。

われわれは、このような、部落民、沖縄人民、在日中朝人民に対する、差別・分断・同化攻撃と、アジア人民に対する帝国主義の尖兵に仕たて上げんとする反共・反革命イデオロギー攻撃をあらゆる部所で徹底的に粉砕しなければならない。

官僚的・警察的・軍隊的支配の強化と安保ー日「韓」体制の暴力的支配

六五年日韓条約締結以来、本格的なアジア侵略反革命の道を突き進んできた日帝に対して、われわれは、社・共人民戦線派の議会主義への没入という日和見主義と断固訣別し、「国際主義」と「組織された暴力」をかかげ、安保粉砕！　日帝打倒！　の闘いとしてベトナム反戦闘争を闘い抜いてきた。燃え上がる武装闘争の拡大は、日帝の「民主」的ポーズの皮をはぎ取り、破防法弾圧攻撃という帝国主義のむきだしの支配をあらわにさせた。

このむきだしの暴力的支配の全面的強化が、まさしく、官僚的・警察的・軍隊的支配への転成という帝国主義天皇制攻撃として、今やプロレタリアート人民の頭上に打ちおろされんとしているのだ。

だがしかし、いかなる弾圧も、決して革命の炎を消し去ることはできず、帝国主義者はますます危機へと転落する以外にないことが、はっきりとした確信として全世界の人民の心の中に焼きつけられた。ベトナム、インドシナ人民がそれを証明し、韓国民衆の不屈の闘いがそれを証明している。

すべての同志諸君！　日本帝国主義の反革命罪状の数々を決して忘れてはならない。

五月三十日サイゴン解放の日、在日ベトナム大使館へ突入したベトナム人留学生に対して、日本帝国主義の野蛮な尖兵機動隊は、二十九名を逮捕し、大使館に打ちたてられた解放戦線旗を破りすてた。このような暴挙を行なったのは、日本帝国主義のみである。

しかも、留学生に対しなぐる蹴るの暴行を働き、逮捕学生には髪の毛を引っぱり、雑布を口に押し込むという、リンチを行なったのである。そればかりか、「日本の警官はベトコンを絶対に許さない」「ベトナムのブタやろう」などと、許すことのできない暴言をはいたのである。

われわれは、このような日帝の暴挙を許してしまったことを徹底的に恥じるとともに、日帝のこのベトナム人民に対する凶悪な暴行、徹底した差別と蔑視を絶対に許すことはできない。

「民族自決は歴史の流れ」などと、かっての反革命行為をかくしてぬけぬけと語るその裏で、こうした許すことのできない暴力的弾圧を公然となしている事実の中にこそ、日本帝国主義の一切の性格があらわれている。

狭山差別裁判糾弾の血叫び、数百年の部落差別を、一切をかけて糾弾する部落大衆に対して、十・三一大暴虐をもって石川氏を獄舎にとじ込め、差別キャンペーンをふりまいて部落大衆を差別の鎖につなぎとめようとする攻撃の中にこそ、日帝の真の姿が暴露されている。

韓国民衆が、自らの死を賭して決起し、子供から老人に至るまで、進んで朴打倒・日帝

追放の闘いの血叫びをあげているのに対して、独裁者朴正熙を公然と擁護し、そればかりか、この独裁者を手先として、全韓国を「馬山」化し、日韓定期閣僚会議を通じて更なる　韓国侵略反革命をなして、再び韓国民衆を支配の下におこうとすることの中に、日帝の暴力的で侵略的本質がはっきりとあらわれている。

米軍政の暴力的支配の下、全沖縄人民は不屈の意志をもって沖縄解放の闘いをねばり強く行なってきた。こうした沖縄人民に対する回答が、自衛隊の沖縄派兵であり、海洋博を通じた更なる全島軍事基地化であり、アジア侵略反革命戦争へのふみ台に再び沖縄を仕たて上げようとする、許すことのできない暴挙である。そして皇太子訪沖によって、沖縄人民に対して、日帝に土下座し、反革命統合を認めよとせまっているのである。

このような日本帝国主義の反革命罪状の数々は、かっての第二次帝国主義戦争における　もっとも侵略的で暴力的な日帝の性格をあますところなくあらわに示しているのみならず、それ以上の凶悪な性格をはっきり示している。同時に、こうした官僚的、警察的、軍隊的な暴力支配を通じて侵略反革命戦争への突入を必死で画策する日帝の野望をはっきりと示している。

このような、アジア人民、沖縄人民の不倶戴天の敵として登場した日本帝国主義者が、天皇訪米を通じて、アジアの盟主にのし上がらんとする攻撃を、われわれは絶対に許すわけにはいかない。

自らの支配の根底的危機を、アジア人民の頭上に君臨し、被差別大衆を底なしの差別の淵に葬り去り、被抑圧人民・プロレタリアの犠牲の下に乗り切らんとする帝国主義天皇制攻撃、十月天皇訪米を、何としても粉砕しなければならない。日本プロレタリアート人民は、自らの階級的責務として、その最前線に立たねばならない。

ベトナム・インドシナ人民の英雄的な闘いに学び、十月天皇訪米を阻止しよう。

アジア人民への血債にかけて、帝国主義天皇制攻撃と真正面から対決し、十月天皇訪米を何が何でも絶対に阻止しよう。

「戦旗」販売書店

（関東）

〈東京〉

郁文堂　文京区本郷六ー一七ー一〇　電話八一一ー二八〇二
ウニタ書舗　千代田区神田神保町一ー五三　電話二九一ー五五三三
かんたんむ　杉並区高円寺四ー四ー一四　電話三一五ー三〇八九
苦悩舎　渋谷区恵比寿西二ー八ー六安田ビル　電話四六一ー六三五四
幻游社　世田谷区北沢二ー一三ー五　電話四一三ー九六〇九
コマバ書店　目黒区駒場二ー四ー五　電話四六七ー九八七三
高野書店　豊島区池袋二ー一一ー一三　電話九七一ー〇八四九
文献堂　新宿区戸塚一ー四八〇　電話二〇三ー二九七六
文鳥堂　新宿区四谷一ー四野原ビル　電話三五三ー二六〇三
明大生協　千代田区神田駿河台一ー一　電話二九三ー二二〇一
模索舎　新宿区新宿二ー四ー九　電話三五二ー三六六八
雄文堂　品川区上大崎二ー二七ー七　電話四九一ー六七二二
吉祥寺ウニタ　武蔵野市吉祥寺本町二ー二〇ー七　電話〇四二二ー二二ー九六一八
アヴァン書房　国分寺市南町二ー一八ー三国分寺マンション　電話〇四二三ー二三ー七二六〇

〈神奈川〉

ルビコン書房　横浜市神奈川区鶴屋町一ー八　電話〇四五ー三一二ー〇六一〇
川崎ルビコン　川崎市川崎区東田町四ー一一九　電話〇四四ー二二ー五七八四

〈埼玉〉

上野台書店　上福岡市上福岡一ー一一五　電話〇四九二ー六一ー三二八五
盛文堂書店　狭山市入間川三ー四ー二〇　電話〇四二九ー五二ー二八一五

戦旗派政治集会

インドシナ人民の勝利に学び
侵略反革命戦争を蜂起・内戦へ！

■基調報告　日向　翔

日時　八月十日　午後六時

場所　未定